

# 基礎分野

授業科目	対象学年	学期	講義方法	担当教員
心理学	1	前期・後期	講義・実習	関根 剛
<b>授業の目標</b> 教養としての心理学の基礎について学ぶ。さらに、将来臨床の現場で遭遇すると思われる様々な状況について考察・研修するための思考法の基礎を習得する。				
<b>授業の概要</b> テキストを用い心理学の基礎、ならびに、臨床の現場で遭遇すると思われる様々な状況について考察・研修する方法について説明する。				
<b>授業計画</b>  第1週 ガイダンス、心理学とは 第2週 知覚の働き 1) 知覚とは 第3週 2) 知覚の統合性、錯覚 第4週 3) 情動・欲求の効果 第5週 欲求と動機づけ、欲求不満 第6週 感情・情緒とは 第7週 学習 1) 学習とその方法 第8週 2) 学習結果の保存（記憶の過程） 第9週 3) 思考の働き 第10週 心の発達 1) 胎児期～児童期 第11週 2) 青年期～中・高年期 第12週 性格と知能 1) 性格について 第13週 2) 知能について 第14週 対人行動の心理 第15週 集団行動の心理				
<b>テキスト</b> あなたのこころを科学する Ver3：林 智一・有馬比呂志・他 著 北大路書房				
<b>教材・参考文献</b>				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない100点満点の60点以上を合格とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目	対象学年	学期	講義方法	担当教員
哲 学	1	前期・後期	講義・実習	黒川 勲
<b>授業の目標</b> 教養としての哲学の基礎を理解する。				
<b>授業の概要</b> テキストを用いて哲学の基礎について説明する。				
<b>授業計画</b>				
第1週	哲学の誕生	1) 人間の心の歴史、動物の行動と人間的行動		
第2週		2) 哲学の誕生（呪術的・神話的思考から哲学へ）		
第3週	西洋哲学	1) 古代哲学（ソクラテス、プラトン、アリストテレス）		
第4週		2) 中世哲学（古代から中世へ、中世から近代へ）		
第5週		3) 近代哲学（デカルト、カント、ヘーゲル、ニーチェ）		
第6週		4) 近代哲学（先駆者、思想状況、人間諸科学の方法論的改革）		
第7週	現代哲学の諸傾向とその問題点	1) 現象学、実在主義		
第8週		2) コルクス主義、プラグマティズム		
第9週		3) 構造主義		
第10週		4) 分析哲学		
第11週	人間における自然と分化			
第12週	心と身体			
第13週	哲学における死の問題			
第14週	人間の社会性			
第15週	人間の自覚としての哲学			
<b>テキスト</b> 基礎講座 哲学：木田 元・須田 朗 監修 メヂカルフレンド社				
<b>教材・参考文献</b>				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない100点満点の60点以上を合格とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目	対象学年	学期	講義方法	担当教員
歴史学	1	前期・後期	講義・実習	実務経験者（柔道整復師） 安東 鉄男
<b>担当教員の実務経験</b>				
柔道整復師として柔道大会等の現場経験を有し、数多くの外傷治療経験をもつ。専門学校教員として、豊富な経験を活かした整復法や検査法などの実践を担当している。				
<b>授業の目標</b>				
「温故知新」「古きを温（たず）ねて新しきを知る」を原点にして、医療・医学及び柔道整復学がいかなるかを考える。				
<b>授業の概要</b>				
医学・医療史、柔道整復史の関する講義に加えて、ビデオ鑑賞と医学史探索を行う。				
<b>授業計画</b>				
第1週	柔道整復術の歴史			
第2週	疫病：感染症の歴史			
第3週	柔道と嘉納治五郎			
第4週	古代ギリシアの医学；ヒポクラテスとガレノス			
第5週	オリンピック創始者嘉納治五郎			
第6週	医心方			
第7週	戦後の東洋医学と一松定吉			
第8週	ルネサンスの医学:ヴェサリウスとダ・ヴィンチ			
第9週	解体新書と杉田玄白・前野良沢			
第10週	江戸中期における豊後の医学者；三浦梅園			
第11週	世界の心臓学を拓いたウィリアム・ハーヴェーと田原淳			
第12週	豊後における西洋医学とルイス・アルメイダ			
第13週	東洋医学			
第14週	医学史探索：杵築、国東			
第15週	医学史探索：杵築、国東			
テキスト	なし			
<b>教材・参考文献</b>				
図説医学史：小川鼎三監訳、朝倉書店、人体観の歴史：坂井建雄、岩波書店、日整のあゆみ				
<b>成績評価の方法</b>				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・定期試験の成績で評価する。</li> <li>・筆記試験を行い100点満点の60点以上を合格とする。</li> </ul> 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 教育学	対象学年 1	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 伊藤 安浩
<b>授業の目標</b> 現代社会における教育の本質的なあり方や現状と課題を理解し、教育の果たす役割について学ぶ。				
<b>授業の概要</b> 資料を使用し、主に教育の歴史と思想、学校教育の本質、生涯学習、そして情報化社会と教育の課題について説明を行う。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス、なぜ「教育学」なのか 第2週 「教育」とは 1) 教育の現状 第3週 2) 人間の発達の可能性 第4週 3) 人間にとっての「教育」とは 第5週 4) 人間としての諸機能 第6週 子供観の変遷 1) 古代・中世 第7週 2) 近世 第8週 3) 近代 第9週 4) 子供の権利 第10週 家 族 1) アメリカの家族観 第11週 2) 韓国の家族観 第12週 3) 日本の家族観 第13週 4) 家族 第14週 教育に関する法律の動向 第15週 まとめ				
<b>テキスト</b>				
<b>教材・参考文献</b>				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行い100点満点の60点以上を合格とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目  生 物 学	対象学年  1	学期  前期・後期	講義方法  講義・実習	担当教員  兒嶋 彰一
<b>授業の目標</b> 生命の科学について学び、医学を学んでいくために必要な人体の構造と機能に関する基本的な知識を習得する。				
<b>授業の概要</b> テキストを用いて人体の構造と機能に関する項目を説明する。				
<b>授業計画</b> 第1週 生命認識の歴史 第2週 細胞の成り立ち 第3週 代謝 第4週 消化と吸収 第5週 刺激の受容と反応 第6週 ホルモンによる生体機能の調節 第7週 免疫反応（侵入物に対する生態防衛） 第8週 生命の連続性と遺伝 第9週 遺伝の仕組みと調節 第10週 ヒトの遺伝 第11週 ヒトの発生 第12週 生物の発生・分化のしくみ 第13週 生命の寿命とバイオテクノロジー 第14週 ウィルス 第15週 地球環境と人間				
<b>テキスト</b> 看護学生のための生物学：堀 輝三・巨智部直久 著 医学書院				
<b>教材・参考文献</b>				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない100点満点の60点以上を合格とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目  国語	対象学年  1	学期  前期・後期	講義方法  講義・実習	担当教員  光法 真帆																																																												
<b>授業の目標</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・社会人として必要な漢字力、要約力、読解力を中心に、一般教養を身につける。</li> <li>・実践授業を実施し、資格の取得、就職に関わる国語表現能力を身につける。</li> </ul>																																																																
<b>授業の概要</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・担当作成のプリント演習と聴講によるノート作成を実施する。</li> </ul>																																																																
<b>授業計画</b> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td>第1週</td> <td>国語の概要</td> <td>接遇</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第2週</td> <td>漢字力1</td> <td>自身確認</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第3週</td> <td>読解力1</td> <td>自身確認</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第4週</td> <td>要約力1</td> <td>アピールポイント</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第5週</td> <td>漢字力2</td> <td>志望動機書</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第6週</td> <td>読解力2</td> <td>志望動機書</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第7週</td> <td>要約力2</td> <td>レポート</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第8週</td> <td colspan="3">復習（1～7）</td> </tr> <tr> <td>第9週</td> <td>文章力1</td> <td></td> <td>手紙文・メール</td> </tr> <tr> <td>第10週</td> <td>コミュニケーション能力1</td> <td></td> <td>履歴書</td> </tr> <tr> <td>第11週</td> <td>文章力2</td> <td></td> <td>電話の対応</td> </tr> <tr> <td>第12週</td> <td>コミュニケーション能力2</td> <td></td> <td>面接</td> </tr> <tr> <td>第13週</td> <td>文章力3</td> <td></td> <td>小論文</td> </tr> <tr> <td>第14週</td> <td>コミュニケーション能力3</td> <td></td> <td>小論文</td> </tr> <tr> <td>第15週</td> <td colspan="3">総復習</td> </tr> </table>					第1週	国語の概要	接遇		第2週	漢字力1	自身確認		第3週	読解力1	自身確認		第4週	要約力1	アピールポイント		第5週	漢字力2	志望動機書		第6週	読解力2	志望動機書		第7週	要約力2	レポート		第8週	復習（1～7）			第9週	文章力1		手紙文・メール	第10週	コミュニケーション能力1		履歴書	第11週	文章力2		電話の対応	第12週	コミュニケーション能力2		面接	第13週	文章力3		小論文	第14週	コミュニケーション能力3		小論文	第15週	総復習		
第1週	国語の概要	接遇																																																														
第2週	漢字力1	自身確認																																																														
第3週	読解力1	自身確認																																																														
第4週	要約力1	アピールポイント																																																														
第5週	漢字力2	志望動機書																																																														
第6週	読解力2	志望動機書																																																														
第7週	要約力2	レポート																																																														
第8週	復習（1～7）																																																															
第9週	文章力1		手紙文・メール																																																													
第10週	コミュニケーション能力1		履歴書																																																													
第11週	文章力2		電話の対応																																																													
第12週	コミュニケーション能力2		面接																																																													
第13週	文章力3		小論文																																																													
第14週	コミュニケーション能力3		小論文																																																													
第15週	総復習																																																															
<b>テキスト</b>																																																																
<b>教材・参考文献</b> 随時、プリントなど																																																																
<b>成績評価の方法</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・定期試験の成績で評価する。</li> <li>・筆記試験を行い100点満点の60点以上を合格とする。</li> </ul> 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。																																																																
<b>備考</b>																																																																

授業科目  英 語	対象学年  1	学期  前期・後期	講義方法  講義・実習	担当教員  藤原 和彦
<b>授業の目標</b> 医療の国際化、次世代の医療現状に対応する国際語として臨床的な英語を身につける。				
<b>授業の概要</b> 資料をもとに基礎英語、基本的な医学英語、英会話について指導する。 また、必要に応じ視聴覚教材（映画等）を使用し英語への関心を深める。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス 第2週 Running under two flags 1) part 1 第3週 2) part 2 第4週 3) part 3 第5週 4) part 4 第6週 The Story of the Futon OF Tottori 1) part 1 第7週 2) part 2 第8週 3) part 3 第9週 4) part 4 第10週 2～9までの反省・補足 第11週 医学英語 1) 医療職・医療施設・医療用機器等の名称 第12週 2) 身体各部の名称 第13週 3) 疾病・治療にかかる名称・用語① 第14週 4) 疾病・治療にかかる名称・用語② 第15週 まとめ				
<b>テキスト</b>				
<b>教材・参考文献</b>				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行い100点満点の60点以上を合格とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				



專門基礎分野

<b>授業科目</b> 解剖学（内臓系・神経系）	<b>対象学年</b> 1 年	<b>学期</b> 前期・後期	<b>講義方法</b> 講義・実習	<b>担当教員</b> 高井 教行
<b>授業の目標</b> 解剖学は、人体の仕組みを研究する学問であり、医学・医療の基礎とされ、肉眼解剖学と顕微鏡解剖学（組織学）に大別される。柔道整復師として必要な解剖学特に内臓系・神経系の基礎的知識を習得する				
<b>授業の概要</b> 人体が細胞から構成され、細胞の集まりが組織である。人体を構成する組織が上皮組織、支持組織、筋組織、神経組織の4つからなり、これらの組み合わせによって、臓器（器官）があり、さらに器官系（運動器系、神経系、循環器系、呼吸器系など）からなる。ここでは組織学総論を含め内臓系と神経系を学習する。				
<b>授業計画</b>  第1週 人体解剖学の概説と細胞の構造と機能 第2週 組織の分類と上皮組織の形態・機能 第3週 支持組織の分類と結合組織、軟骨組織、骨組織形態と機能 第4週 血液の分類、形態・機能、造血 第5週 筋組織の分類と各筋の形態的特徴 第6週 内臓学 循環器系・呼吸器系 第7週 内臓学 消化器系・内分泌系 第8週 内臓学 日尿生殖器系 第9週 内臓学 感覚器 第10週 神経組織の分類と形態、神経膠（グリア）形態・機能および血液脳関門 第11週 中枢神経系の一般、脳脊髄膜、脳脊髄液 第12週 中枢神経系、大脳、間脳、脳幹（中脳、橋、延髄）、小脳、脊髄の構造・機能 第13週 伝導路（反射路、上行性伝導路、下行性伝導路） 第14週 末梢神経系、脳神経、脊髄神経（頸神経、胸神経） 第15週 末梢神経系、脊髄神経（腰神経、仙骨神経、尾骨神経）自律神経（交感神経幹、副交感神経）				
<b>テキスト</b> 「解剖学」 社団法人全国柔道整復学校協会監修 医歯薬出版株式会社				
<b>教材・参考文献</b> 人体のふしぎ 講談社、 入門組織学 南江堂				
<b>成績評価の方法</b> 定期末試験（中間・期末）の結果にて評価を行う 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

<b>授業科目</b> 解剖学（運動器、骨格系）	<b>対象学年</b> 1 年	<b>学期</b> 前期・後期	<b>講義方法</b> 講義・実習	<b>担当教員</b> 実務経験者（柔道整復師） 重石 雄大
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院に勤務し、外傷治療の経験を有する。その後、専門学校教員として上肢骨折の講義や実技を担当している。				
<b>授業の目標</b> 人体の支柱となる器官が骨格である。さらに、運動は、骨と筋肉の組み合わせによってなされている。柔道整復師として極めて重要な運動器系の骨に関する基礎的知識を習得する。				
<b>授業の概要</b> 人体が 200 余個の骨からなり、大きく体幹と四肢の骨からなることを学ぶ。体幹と四肢の骨の名前、形、数を覚える。さらに、骨の連結の仕組みを理解する。結果的に、柔道整復師として必要な骨格系の専門的知識を養う。併せて、関節を構成する靭帯についても学ぶ。				
<b>授業計画</b>  第 1 週 骨格系の総論、骨の数、形、一般的構造、発生と発達 第 2 週 体幹と体肢を構成する骨名と数 第 3 週 頭蓋を構成する骨名と数および孔や窩の役割 第 4 週 骨学実習 第 5 週 脊柱を構成する骨名と数、各椎骨の特徴および脊柱の湾曲 第 6 週 脊柱管と椎間孔の役目および脊柱の靭帯と動き 第 7 週 胸郭を構成する骨名、数、役割 第 8 週 骨盤を構成する骨名、数、男女差 第 9 週 骨学実習 第 10 週 上肢を構成する骨名、数、役割 第 11 週 下肢を構成する骨名、数、役割 第 12 週 骨の連結の分類と関節の分類、形態、機能 第 13 週 関節の補助装置 第 14 週 肩関節、股関節、膝関節の形態と機能 第 15 週 まとめ				
<b>テキスト</b> 「解剖学」 社団法人全国柔道整復学校協会監修 医歯薬出版株式会社				
<b>教材・参考文献</b> 日本人体解剖学上巻（骨、筋、神経系） 南山堂				
<b>成績評価の方法</b> 定期末試験（中間・期末）の結果にて評価を行う。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b> 骨格連結模型や骨標本を使った骨学実習を併用する。				

<b>授業科目</b> 解剖学（運動器、関節運動）	<b>対象学年</b> 1 年	<b>学期</b> 前期・後期	<b>講義方法</b> 講義・実習	<b>担当教官</b> 実務経験者（柔道整復師） 重石 雄大																																													
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院に勤務し、外傷治療の経験を有する。その後、専門学校教員として上肢骨折の講義や実技を担当している。																																																	
<b>授業の目標</b> 柔道整復師として必要な人体解剖学、関節の構造や運動などの基礎的、専門的知識を習得する																																																	
<b>授業の概要</b> 運動器は、骨の基礎的・専門的知識のもとに関節を学ぶことによって初めて理解できる。関節の一般的な構造、形、動きについて学ぶ。さらに、全身の関節系の名称、それらを動かす筋肉の作用を把握する。局所解剖的に血管や神経との位置関係についても併せて理解する。																																																	
<b>授業計画</b> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr><td>第 1 週</td><td>関節総論</td><td>骨の連結</td></tr> <tr><td>第 2 週</td><td>関節総論</td><td>関節の分類（構成する骨の数・形状・軸）</td></tr> <tr><td>第 3 週</td><td>関節各論</td><td>顎関節の構造と運動</td></tr> <tr><td>第 4 週</td><td>関節各論</td><td>体幹の関節の構造と運動</td></tr> <tr><td>第 5 週</td><td>関節各論</td><td>胸鎖関節の構造と運動</td></tr> <tr><td>第 6 週</td><td>関節各論</td><td>肩鎖関節の構造と運動</td></tr> <tr><td>第 7 週</td><td>関節各論</td><td>肩関節の構造と運動①</td></tr> <tr><td>第 8 週</td><td>関節各論</td><td>肩関節の構造と運動②</td></tr> <tr><td>第 9 週</td><td>関節各論</td><td>肘関節の構造と運動</td></tr> <tr><td>第 10 週</td><td>関節各論</td><td>手関節・手指関節の構造と運動</td></tr> <tr><td>第 11 週</td><td>関節各論</td><td>股関節の構造と運動</td></tr> <tr><td>第 12 週</td><td>関節各論</td><td>膝関節の構造と運動①</td></tr> <tr><td>第 13 週</td><td>関節各論</td><td>膝関節の構造と運動②</td></tr> <tr><td>第 14 週</td><td>関節各論</td><td>足関節・足指関節の構造と運動</td></tr> <tr><td>第 15 週</td><td>総復習</td><td></td></tr> </table>					第 1 週	関節総論	骨の連結	第 2 週	関節総論	関節の分類（構成する骨の数・形状・軸）	第 3 週	関節各論	顎関節の構造と運動	第 4 週	関節各論	体幹の関節の構造と運動	第 5 週	関節各論	胸鎖関節の構造と運動	第 6 週	関節各論	肩鎖関節の構造と運動	第 7 週	関節各論	肩関節の構造と運動①	第 8 週	関節各論	肩関節の構造と運動②	第 9 週	関節各論	肘関節の構造と運動	第 10 週	関節各論	手関節・手指関節の構造と運動	第 11 週	関節各論	股関節の構造と運動	第 12 週	関節各論	膝関節の構造と運動①	第 13 週	関節各論	膝関節の構造と運動②	第 14 週	関節各論	足関節・足指関節の構造と運動	第 15 週	総復習	
第 1 週	関節総論	骨の連結																																															
第 2 週	関節総論	関節の分類（構成する骨の数・形状・軸）																																															
第 3 週	関節各論	顎関節の構造と運動																																															
第 4 週	関節各論	体幹の関節の構造と運動																																															
第 5 週	関節各論	胸鎖関節の構造と運動																																															
第 6 週	関節各論	肩鎖関節の構造と運動																																															
第 7 週	関節各論	肩関節の構造と運動①																																															
第 8 週	関節各論	肩関節の構造と運動②																																															
第 9 週	関節各論	肘関節の構造と運動																																															
第 10 週	関節各論	手関節・手指関節の構造と運動																																															
第 11 週	関節各論	股関節の構造と運動																																															
第 12 週	関節各論	膝関節の構造と運動①																																															
第 13 週	関節各論	膝関節の構造と運動②																																															
第 14 週	関節各論	足関節・足指関節の構造と運動																																															
第 15 週	総復習																																																
<b>テキスト</b> 「解剖学」 社団法人全国柔道整復学校協会監修 医歯薬出版株式会社																																																	
<b>教材・参考</b> 日本人体解剖学上巻（骨、筋、神経系） 南山堂 解剖学カラーリングテキスト 南江堂																																																	
<b>成績評価の方法</b> 定期末試験（中間・期末）の結果にて評価を行う 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。																																																	
<b>備考</b> 体表観察を併用して学習する。																																																	

<b>授業科目</b> 解剖学（運動器、筋系）	<b>対象学年</b> 2 年	<b>学期</b> 前期・後期	<b>講義方法</b> 講義・実習	<b>担当教官</b> 実務経験者（柔道整復師） 山川 和毅
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院での実務経験を有し、幅広い症状の治療を行う。専門学校教員として柔道整復学の基礎科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 柔道整復師として必要な人体解剖学運動器、筋系の基礎的、専門的知識を習得する				
<b>授業の概要</b> 運動器は、骨の基礎的。専門的知識のもとに筋系を学ぶことによって初めて理解できる。筋肉の一般的な構造、形、起始、停止、腱の役割について学ぶ。さらに、全身の筋系の名称、それらの起始・停止・作用・神経支配を把握する。局所解剖的に血管や神経との位置関係についても併せて理解する。				
<b>授業計画</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>第 1 週 骨格筋一般（形、起始、停止、作用、神経支配、腱、筋膜）</li> <li>第 2 週 頭頸部部の筋：顔面筋、咀嚼筋、胸鎖乳突筋、頸動脈三角、顎下三角、斜角筋裂</li> <li>第 3 週 胸部の浅筋：大胸筋、小胸筋、前鋸筋、補助呼吸筋</li> <li>第 4 週 胸部の深筋：外肋間筋と内肋間筋（胸式呼吸）、横隔膜（腹式呼吸）</li> <li>第 5 週 腹部の筋：腹直筋、外腹斜筋、内腹斜筋、腹横筋、鼠径管</li> <li>第 6 週 腹部の深筋：大腰筋（二足歩行）、腰方形筋と背部の筋</li> <li>第 7 週 背部の浅い筋：僧帽筋、広背筋、菱形筋、と深い筋：脊柱起立筋（最長筋、腸肋筋、棘筋）、</li> <li>第 8 週 体表観察</li> <li>第 9 週 上肢帯、上腕の屈筋と伸筋</li> <li>第 10 週 前腕の屈筋と伸筋、手の筋</li> <li>第 11 週 下肢帯の筋：大殿筋、中殿筋、梨状筋、大坐骨孔</li> <li>第 12 週 大腿の屈筋（ハムストリング）と伸筋（大腿四頭筋）、大腿三角</li> <li>第 13 週 下腿の屈筋（下腿三頭筋、アキレス腱）と伸筋（前脛骨筋）</li> <li>第 14 週 足の筋、扁平足、外反母趾</li> <li>第 15 週 体表観察</li> </ul>				
<b>テキスト</b> 「解剖学」 社団法人全国柔道整復学校協会監修 医歯薬出版株式会社				
<b>教材・参考</b> 日本人体解剖学上巻（骨、筋、神経系） 南山堂 解剖学カラーリングテキスト 南江堂				
<b>成績評価の方法</b> 定期末試験（中間・期末）の結果にて評価を行う 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b> 体表観察を併用して学習する。				

<b>授業科目</b> 解剖学（運動器、筋系）	<b>対象学年</b> 2 年	<b>学期</b> 前期・後期	<b>講義方法</b> 講義・実習	<b>担当教官</b> 実務経験者（柔道整復師） 山川 和毅
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院での実務経験を有し、幅広い症状の治療を行う。専門学校教員として柔道整復学の基礎科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 柔道整復師として必要な人体解剖学運動器、筋系の基礎的、専門的知識を再確認したうえで、触診の技術を学ぶ。				
<b>授業の概要</b> 運動器は、骨の基礎的。専門的知識のもとに筋系を学ぶことによって初めて理解できる。筋肉の一般的な構造、形、起始、停止、腱の役割について学ぶ。さらに、全身の筋系の名称、それらの起始・停止・作用・神経支配を把握する。局所解剖的に血管や神経との位置関係についても併せて理解する。				
<b>授業計画</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>第 1 週 触診総論</li> <li>第 2 週 頭頸部の筋の触診</li> <li>第 3 週 胸部の筋の触診</li> <li>第 4 週 外肋間筋と内肋間筋（胸式呼吸）、横隔膜（腹式呼吸）時の筋運動の確認</li> <li>第 5 週 腹部の筋の触診</li> <li>第 6 週 背部の筋の触診</li> <li>第 7 週 腰部の筋の触診</li> <li>第 8 週 上肢帯の筋の触診</li> <li>第 9 週 上腕部の筋の触診</li> <li>第 10 週 前腕部と手部の筋の触診</li> <li>第 11 週 下肢帯（臀部）の筋の触診</li> <li>第 12 週 大腿部の筋の触診</li> <li>第 13 週 下腿部の筋の触診</li> <li>第 14 週 足部の筋の触診</li> <li>第 15 週 総復習</li> </ul>				
<b>テキスト</b> 「解剖学」 社団法人全国柔道整復学校協会監修 医歯薬出版株式会社				
<b>教材・参考</b> 日本人体解剖学上巻（骨、筋、神経系） 南山堂 運動療法のための機能解剖学的触診技術（上肢・下肢） メディカルビュー				
<b>成績評価の方法</b> 定期末試験（中間・期末）の結果にて評価を行う 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b> 体表観察を併用して学習する。				

<b>授業科目</b> 解剖学（運動器、筋系）	<b>対象学年</b> 2 年	<b>学期</b> 前期・後期	<b>講義方法</b> 講義・実習	<b>担当教官</b> 実務経験者（柔道整復師） 中尾 幸雄
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整形外科や整骨院での実務経験を有する。専門学校教員として人体の構造や機能等、柔道整復学を学ぶに当たっての基礎となる科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 柔道整復師として必要な人体解剖学・運動器、筋系の基礎的、専門的知識を習得し、国家試験対策につなげる。				
<b>授業の概要</b> 運動器は、骨の基礎的。専門的知識のもとに筋系を学ぶことによって初めて理解できる。筋肉の一般的な構造、形、起始、停止、腱の役割について学ぶ。さらに、全身の筋系の名称、それらの起始・停止・作用・神経支配を把握する。局所解剖的に血管や神経との位置関係についても併せて理解する。				
<b>授業計画</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>第 1 週 総復習 骨格筋の特徴と性質</li> <li>第 2 週 総復習 頭頸部部の筋</li> <li>第 3 週 総復習 胸部の浅筋：大胸筋、小胸筋、前鋸筋、補助呼吸筋</li> <li>第 4 週 総復習 胸部の深筋：外肋間筋と内肋間筋（胸式呼吸）、横隔膜（腹式呼吸）</li> <li>第 5 週 総復習 腹部の筋：腹直筋、外腹斜筋、内腹斜筋、腹横筋、鼠径管</li> <li>第 6 週 総復習 腹部の深筋：大腰筋（二足歩行）、腰方形筋と背部の筋</li> <li>第 7 週 総復習 背部の筋：僧帽筋、広背筋、菱形筋、脊柱起立筋（最長筋、腸肋筋、棘筋）、</li> <li>第 8 週 総復習 体表観察（体幹と上肢）</li> <li>第 9 週 総復習 上肢帯、上腕の屈筋と伸筋</li> <li>第 10 週 総復習 前腕の屈筋と伸筋、手の筋</li> <li>第 11 週 総復習 下肢帯の筋：大殿筋、中殿筋、梨状筋、大坐骨孔</li> <li>第 12 週 総復習 大腿の屈筋（ハムストリング）と伸筋（大腿四頭筋）、大腿三角</li> <li>第 13 週 総復習 下腿の屈筋（下腿三頭筋、アキレス腱）と伸筋（前脛骨筋）</li> <li>第 14 週 総復習 足の筋、扁平足、外反母趾</li> <li>第 15 週 総復習 体表観察（下肢）</li> </ul>				
<b>テキスト</b> 「解剖学」 社団法人全国柔道整復学校協会監修 医歯薬出版株式会社				
<b>教材・参考</b> 日本人体解剖学上巻（骨、筋、神経系） 南山堂 解剖学カラーリングテキスト 南江堂				
<b>成績評価の方法</b> 定期末試験（中間・期末）の結果にて評価を行う 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b> 体表観察を併用して学習する。				

<b>授業科目</b> 解剖学（局所解剖、実習）	<b>対象学年</b> 3 年	<b>学期</b> 前期・後期	<b>講義方法</b> 講義・実習	<b>担当教員</b> 実務経験者（柔道整復師） 山川 和毅
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院での実務経験を有し、幅広い症状の治療を行う。専門学校教員として柔道整復学の基礎科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 解剖学は、器官系（骨格系、筋系、神経系、血管系、消化器系）の講義である。柔道整復師学は実践を重んじている学問であり、局所解剖を十分理解する必要がある。				
<b>授業の概要</b> 骨格系、筋系、神経系、血管系を統合した講義を行う。特に、体幹支持と動き、肩関節、肘関節、股関節および膝関節の局所解剖を理解する。また、運動系に関連する骨、筋肉、腱、靭帯、関節軟骨光学顕微鏡下で観察し、これらの組織構造を理解することによって関節運動の仕組みをより深く理解する。				
<b>授業計画</b> 第 1 週 体幹を構成する骨の連結と靭帯 第 2 週 体幹の支持と動きを支配する筋肉 第 3 週 椎間孔と脊髄神経および椎間孔と椎間円板との関わり 第 4 週 肩関節を構成する骨とそれを支える靭帯 第 5 週 肩関節の動きに関連する筋肉、神経、血管 第 6 週 肘関節を構成する骨とそれを支える靭帯 第 7 週 肘関節の動きに関連する筋肉、神経、血管 第 8 週 股関節を構成する骨とそれを支える靭帯 第 9 週 股関節の動きに関連する筋肉、神経、血管 第 10 週 膝関節を構成する骨とそれを支える靭帯 第 11 週 膝関節の動きに関連する筋肉、神経、血管 第 12 週 上行性伝導路、下行性伝導路、反射路の解説 第 13 週 赤筋と白筋の違い（腓腹筋とヒラメ筋の光学顕微鏡観察） 第 14 週 腱、靭帯、関節軟骨の組織構造（講義と光学顕微鏡観察） 第 15 週 まとめ				
<b>テキスト</b> 「解剖学」 社団法人全国柔道整復学校協会監修 医歯薬出版株式会社				
<b>教材・参考文献</b> 人体のしくみ、講談社				
<b>成績評価の方法</b> 定期末試験（中間・期末）の結果にて評価を行う。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b> 骨格連結模型および関節模型を活用する				



授業科目  解剖学	対象学年  3	学期  前期・後期	講義方法  講義・実習	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 中尾 幸雄
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整形外科や整骨院での実務経験を有する。専門学校教員として人体の構造や機能等、柔道整復学を学ぶに当たっての基礎となる科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 1. 柔道整復の専門基礎・専門科目の習得に必要な基本的な用語を理解する。 2. 生体の観察・計測等に必要な基本的知識について理解する。				
<b>授業の概要</b> 1. 柔道整復の専門基礎・専門科目の習得に最小限度必要な人体に関わる用語、解剖学用語、柔整・整形外科用語、医学臨床用語の基礎知識について説明する。 2. 人体模型、プリント、OHP、スライド等を必要に応じ配布または使用する。				
<b>授業計画</b> 第1週     ガイダンス 第2週     計測の基礎     1) 長さの計測   2) 太さの計測 第3週                     3) 角度計   4) 筋力測定 第4週                     4) 脈の触診   5) 血圧測定 第5週     頸部   1) 角度測定   2) 脈の触診と部位 第6週     上肢   1) 上肢長測定   2) 上腕と前腕の周径 第7週                     3) 脈の触診 第8週                     4) 筋力測定 第9週     背部と腰部   1) 角度測定 第10週                    2) 筋力測定 第11週    下肢   1) 下肢長測定   2) 大腿と下腿の周径 第12週                     3) 角度測定 第13週                     4) 脈の触診と部位 第14週                     5) 筋力測定 第15週     試験				
<b>テキスト</b>				
<b>教材・参考文献</b> 1. 解剖学：岸 清・石塚 寛 編 医歯薬出版     2. 運動学：斉藤 宏 著 医歯薬出版 3. 柔道整復学（理論編）：社団法人 全国柔道整復学校協会・教科書委員会 編集 南江堂				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b> 配布したプリント、参考文献 1・2 を毎時間持参する。				

授業科目  解剖学	対象学年  3	学期  前期・後期	講義方法  講義・実習	担当教員  実務経験者（柔道整復師） 中尾 幸雄
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整形外科や整骨院での実務経験を有する。専門学校教員として人体の構造や機能等、柔道整復学を学ぶに当たっての基礎となる科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 1. 柔道整復の専門基礎・専門科目の習得に必要な基本的な用語を理解する。 2. 生体の観察・計測等に必要な基本的知識について理解する。				
<b>授業の概要</b> 1. 柔道整復の専門基礎・専門科目の習得に最小限度必要な人体に関わる用語、解剖学用語、柔整・整形外科用語、医学臨床用語の基礎知識について説明する。 2. 人体模型、プリント、OHP、スライド等を必要に応じ配布または使用する。				
<b>授業計画</b> 第1週 頸部 1) 骨の触診 2) 軟部組織の触診 3) 可動域 4) 頸部の理学的検査 第2週 肩部 1) 骨の触診 2) 軟部組織の触診 3) 可動域 第3週 肩部の理学的検査 第4週 肘部 1) 骨の触診 2) 軟部組織の触診 3) 可動域 第5週 肘部の理学的検査 第6週 手部 1) 骨の触診 2) 軟部組織の触診 3) 可動域 第7週 手部の理学的検査 第8週 腰部 1) 骨の触診 2) 軟部組織の触診 3) 可動域 第9週 腰部の理学的検査 第10週 股関節部 1) 骨の触診 2) 軟部組織の触診 3) 可動域 4) 股関節部の理学検査 第11週 膝部 1) 骨の触診 2) 軟部組織の触診 3) 可動域 第12週 膝部の理学的検査 第13週 足部 1) 骨の触診 2) 軟部組織の触診 3) 可動域 第14週 足部の理学的検査 第15週 試験				
<b>テキスト</b>				
<b>教材・参考文献</b> 1. 解剖学：岸 清・石塚 寛 編 医歯薬出版      2. 運動学：斉藤 宏 著 医歯薬出版 3. 柔道整復学（理論編）：社団法人 全国柔道整復学校協会・教科書委員会 編集 南江堂				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b> 配布したプリント、参考文献 1・2 を毎時間持参する。				

授業科目  生理学	対象学年  1	学期  前期・後期	講義方法  講義・実習	担当教員  清永 真理
<b>授業の目標</b> 生体を構成する細胞・組織・臓器および個体の生命現象のしくみについて分かりやすく解説する。				
<b>授業の概要</b> 生理学の基礎を学び、また複数の臓器が連携して機能を果たしている器官系（循環器系、血液・造血器系、呼吸器系）の構成と機能を学び、生命がどのような仕組みで保たれているかについて理解する。消化器系、泌尿器系の構成と機能を学び、生命がどのような仕組みで保たれているかについて理解する。また栄養について学び、食物が身体の中でどのようにエネルギーに変わるのか理解する。				
<b>授業計画</b> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生理学の基礎 A 人体を構成する要素 B ホメオスタシス C 細胞の機能的構造 D 物質の移動</li> <li>2. 体液の生理学 A 体液の区分と水のバランス B 体液のイオン組成 C 体液の恒常性を維持</li> <li>3. 血液の生理学 A 血液の役割 B 組成 C 免疫機能 D 血液型 E 血液の凝固</li> <li>4. 循環の生理学 A 心臓の機能 B 血管系 C リンパ管系 D 循環の調節 E 局所循環 F 脳脊髄液循環</li> <li>5. 呼吸の生理学 A 呼吸器の機能的構造 B 換気 C ガス交換 D 血液中の酸素の運搬 E 血液による二酸化炭素の運搬 F 呼吸を調節するしくみ G 呼吸の異常</li> <li>6. 消化と吸収 A 消化器系の働きとその調節 B 消化液の分泌機序 D 消化 E 吸収 F 消化管ホルモン G 肝臓と胆道系</li> <li>7. 栄養と代謝 A 代謝 B 中間代謝 C エネルギー代謝</li> <li>8. 体温とその調節 A 体温 B 体温の生理的変動 C 体内における熱の産生 D 熱放散 E 体温の調節 F うつ熱と発熱 G 気候馴化</li> <li>9. 尿の生成と排泄 A 腎の機能的構造 B ろ過 C 尿細管における再吸収 D 尿細管における分泌</li> <li>10. 内分泌系の機能 A 内分泌腺 B ホルモンの一般的性質 C ホルモンの種類と作用 D 視床下部下垂体</li> <li>11. 内分泌系の機能 F 甲状腺ホルモン G 副腎皮質ホルモン H 副腎髄質ホルモン</li> <li>12. 内分泌系の機能 I 膵臓ホルモン J 精巣ホルモン K 卵巣ホルモン</li> <li>13. 生殖 A 染色体とその異常性分化 C 男子生殖器系の構成と精子形成 E 勃起と射精</li> <li>14. 生殖 F 女子生殖器系の構成 G 卵巣の周期 H 月経周期 I 妊娠と分娩 J 乳汁分泌</li> <li>15. 骨の生理学 A 構造 B 形成と成長 C 骨の再吸収と再形成 D カルシウム代謝のホルモンによる調節</li> </ol>				
<b>テキスト</b> 『生理学』 根来 英雄 貴邑 富久子 著（社団法人 全国柔道整復学校協会 監修）				
<b>教材・参考文献</b>				
<b>成績評価の方法</b> 定期末試験（中間・期末）の結果にて評価を行う 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目  生理学	対象学年  1	学期  前期・ <u>後期</u>	講義方法  <u>講義</u> ・実習	担当教員  清永 真理
<b>授業の目標</b> 生体を構成する細胞・組織・臓器および個体の生命現象のしくみについて分かりやすく解説する。				
<b>授業の概要</b> 生体を構成する細胞・組織・臓器および個体の生命現象のしくみについて分かりやすく解説する。 神経系では、神経系の成り立ちや生体の行動の具体的な事象、睡眠、情動、記憶、学習などについて理解する。				
<b>授業計画</b> 1. 神経の基本的構造 A 神経細胞の形態 B 静止膜電位と活動電位 C 興奮の伝導 D 興奮の伝達 2. 神経系の機能 A 神経系の成り立ち 3. 神経系の機能 B 内臓機能の調節 C 内臓機能の視床下部による調節 4. 神経系の機能 D 姿勢と運動の調節 p 2 0 3 ~ p 2 1 0 5. 神経系の機能 D 姿勢と運動の調節 p 2 1 0 ~ p 2 2 1 6. 神経系の機能 E 高次機能 p 2 2 1 ~ p 2 2 4 7. 神経系の機能 E 高次機能 p 2 2 4 ~ p 2 2 9 8. 筋肉の機能 A 骨格筋の構造 B 筋収縮の仕組み 9. 筋肉の機能 C 筋細胞膜を興奮させる仕組み D 骨格筋の収縮 10. 筋肉の機能 F 筋収縮のエネルギー G 筋の発生 H 筋電図 I 平滑筋 J 心筋 11. 感覚の生理学 A 感覚の種類 B 感覚の一般的性質 12. 感覚の生理学 C 体性感覚 D 内臓感覚 13. 感覚の生理学 E 嗅覚と味覚 14. 感覚の生理学 F 聴覚 G 前庭感覚 15. 感覚の生理学 H 視覚				
<b>テキスト</b> 『生理学』 根来 英雄 貴邑 富久子 著 (社団法人 全国柔道整復学校協会 監修)				
<b>教材・参考文献</b>				
<b>成績評価の方法</b> 定期末試験（中間・期末）の結果にて評価を行う 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目  運動学	対象学年  2	学期  前期・後期	講義方法  講義・実習	担当教員  稲垣 敦
<b>授業の目標</b> 運動学の基礎ならびに運動障害をもつ患者を治療するために必要な人間の運動に関わる身体の機能と構造について理解する。				
<b>授業の概要</b> テキストを用いて運動学の基礎、ならびに臨床の場で運動障害をもつ患者を診て治療するために必要な人間の運動に関わる基本的な身体の機能と構造について説明する。				
<b>授業計画</b> 第1週 身体運動と力学 1) 身体運動に関する力、人体における単一機能構造 2) 運動の法則 第2週 仕事と力学的エネルギー運動器の構造と機能 1) 骨・関節 2) 骨格筋 第3週 神経の構造と機能 1) 神経細胞、末梢神経 2) 中枢神経 運動感覚 第4週 反射と脊髄運動 1) 反射 2) 随意運動 第5週 四肢と体幹の運動 1) 上肢 ①上肢帯②肩関節③肘関節・前腕④手関節⑤手部 第6週 四肢と体幹の運動 2) 下肢 ①股関節②膝関節③足関節④足部 第7週 3) 体幹 ①脊柱・頸椎②胸椎・腰椎③顔面・頭部 第8週 姿勢（分類、重心、立位姿勢、他） 第9週 歩行 1) 歩行周期、運動学的分析 第10週 2) 運動力学的分析、歩行時の筋活動 第11週 3) エネルギー代謝、異常歩行 第12週 運動発達 1) 神経組織の成熟 第13週 2) 乳幼児期の運動発達 第14週 運動学習 第15週 まとめ				
<b>テキスト</b> 運動学：斉藤 宏 著 社団法人 全国柔道整復学校協会 監修 医歯薬出版社				
<b>教材・参考文献</b> 鍼灸師・柔道整復師のための局所解剖カラーアトラス：北村清一郎 編集 南江堂 おもしろ解剖学読本：加藤征治、三浦真弘 共著 金芳堂				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				

<b>授業科目</b> 成長と発達 （高齢者の生理学的特徴・変化）	<b>対象学年</b> 2	<b>学期</b> 前期・(後期)	<b>講義方法</b> (講義)・実習	<b>担当教員</b> 稲垣 敦
<b>授業の目標</b> 人体の生理学的機能を理解するとともに、人体機能の成長と発達を学ぶ。特に高齢者の生理学的特徴や変化を捉え、臨床に役立つ力を身につける。				
<b>授業の概要</b> テキストならびに参考文献を用いて、人体の発生と成長について理解を深める。 必要に応じてプリントや映像を使用する。進度により小テストを行い、理解度を把握する。 また、高齢者の生理学的特徴を学び、高齢社会の現代で通用する臨床力を身につける。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス・人体の発生について骨の基本的構造と成長筋の基本的構造と成長 第2週 筋収縮と筋力 幼児期の生理学的特徴 第3週 成人期の生理学的特徴 高齢期の生理学的特徴 第4週 発育・発達と老化 第5週 高齢者と健康 高齢者と運動 第6週 高齢者に起こりやすい疾患 骨粗鬆症についての基礎知識 第7週 高齢者の神経機能と認知症 高齢者に対する臨床 第8週 まとめ				
<b>テキスト</b> 生理学：全国柔道整復学校協会 監修 根来 英雄 ・ 貴邑 富久子 編 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 解剖学：全国柔道整復学校協会 監修 岸 清 ・ 石塚 寛 編 医歯薬出版 イラスト 運動生理学				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀 (90 点以上)、優 (80 点以上)、良 (70 点以上)、可 (60 点以上)、不可 (60 点未満) とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 アスリーートの生理 (競技者の生理学的特徴・変化)	対象学年 2	学期 前期・(後期)	講義方法 (講義)・実習	担当教員 稲垣 敦
<b>授業の目標</b> 人体の生理学的機能を理解するとともに、アスリーートの生理学的特徴について学ぶ。日々トレーニングを行う競技者の呼吸機能・循環機能などの特異性を認識し、臨床力を身につける。				
<b>授業の概要</b> テキストならびに参考文献を用いて、アスリーートの機能的特性について理解する。 必要に応じてプリントや映像を使用し、アスリーートの具体的な生理学的数値に触れる。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス・アスリーートの生理学的特徴について 骨格筋の収縮と神経支配 第2週 筋力トレーニングと筋線維の発達 アスリーートの呼吸機能、循環機能、食事と栄養 第3週 ジュニアアスリーートの生理学的特徴 成人アスリーートの生理学的特徴 第4週 女性アスリーートの生理学的特徴 スポーツと月経周期 スポーツと妊娠 第5週 高齢アスリーートの生理学的特徴 第6週 生理学的特徴を踏まえたコンディショニング 第7週 生理学的特徴を踏まえたトレーニング 第8週 まとめ				
<b>テキスト</b> 生理学：全国柔道整復学校協会 監修 根来 英雄 ・ 貴邑 富久子 編 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 解剖学：全国柔道整復学校協会 監修 岸 清 ・ 石塚 寛 編 医歯薬出版 女性スポーツの医学 目崎 登 著				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀 (90 点以上)、優 (80 点以上)、良 (70 点以上)、可 (60 点以上)、不可 (60 点未満) とする。				
<b>備考</b>				

<p>授業科目</p> <p style="text-align: center;">運動学</p>	<p>対象学年</p> <p style="text-align: center;">3</p>	<p>学期</p> <p style="text-align: center;">前期・(後期)</p>	<p>講義方法</p> <p style="text-align: center;">(講義)・実習</p>	<p>担当教員</p> <p style="text-align: center;">実務経験者（柔道整復師） 宮迫 宏治</p>
<p><b>担当教員の実務経験</b></p> <p>柔道整復師として豊富な治療経験を有し、様々な症状の患者と接する。専門学校教員として、人体の動きの基礎となる学問などを担当している。</p>				
<p><b>授業の目標</b></p> <p>運動器（骨・筋肉・関節）に関わる解剖学的知識や生理学的機能を理解し、臨床に役立つ力を身につける</p>				
<p><b>授業の概要</b></p> <p>テキストならびに参考文献を用いて運動器について理解を含める。</p> <p>必要に応じてプリントや映像を使用することにより、理解を深め、国家試験に対する実践力を養う。</p> <p>また、柔道整復師として必要な触診力（骨・筋肉・関節）を身につける。</p>				
<p><b>授業計画</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>第 1 週    ガイダンス・運動器についての基礎知識</li> <li>第 2 週    骨の構造と機能（構成・発生と成長・ビタミン・ホルモン）</li> <li>第 3 週    頭部・体幹部の骨</li> <li>第 4 週    上肢の骨</li> <li>第 5 週    下肢の骨</li> <li>第 6 週    関節の構造と機能（構造・分類）</li> <li>第 7 週    頭部（顎関節）と体幹部の関節とその運動</li> <li>第 8 週    上肢の関節とその運動</li> <li>第 9 週    下肢の関節とその運動</li> <li>第 10 週   骨格筋の構造と機能（構造・筋線維の種類・筋収縮の様態・筋の働き）</li> <li>第 11 週   頭部・体幹部の筋</li> <li>第 12 週   上肢の筋</li> <li>第 13 週   下肢の筋</li> <li>第 14 週   筋と神経のつながり</li> <li>第 15 週   まとめ</li> </ul>				
<p><b>テキスト</b></p> <p>運動学：全国柔道整復学校協会 監修 斎藤 宏 編 医歯薬出版</p>				
<p><b>教材・参考文献</b></p> <p>解剖学：全国柔道整復学校協会 監修 岸 清 ・ 石塚 寛 編 医歯薬出版</p>				
<p><b>成績評価の方法</b></p> <p>定期試験の成績で評価する。</p> <p>なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。</p> <p>秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。</p>				
<p><b>備考</b></p>				



授業科目 病理学	対象学年 1	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 高井 教行
<b>授業の目標</b> 疾病の形態、機能・代謝の変化を学び、臨床に必要な疾病の鑑別、施術、処置法の基本を理解する。				
<b>授業の概要</b> テキスト・視聴覚教材を用いて疾病の病理、鑑別、施術、処置法について説明する。				
<b>授業計画</b> 第 1 週 病理学とは、病理学の意義 第 2 週 疾病の一般 第 3 週 病因 1) 内因（素因と体質、遺伝、内分泌障害、免疫） 第 4 週 2) 外因（栄養障害） 第 5 週 3) 外因（物理的外因） 第 6 週 4) 外因（化学物質） 第 7 週 5) 外因（病的微生物の病因作用） 第 8 週 代謝異常 1) 萎縮・変性 第 9 週 2) 壊死・死 第 10 週 循環障害 1) 充血、うっ血、虚血、出血 第 11 週 2) 血栓症、塞栓症、梗塞 第 12 週 3) リンパ液の循環障 第 13 週 進行性病変 1) 肥大、過形成、再生、化生 第 14 週 2) 創傷治癒、組織内異物の処理 第 15 週 炎症の一般・分類				
<b>テキスト</b> 病理学概論：全国柔道整復学校協会 監修 関根一郎 著 医歯薬出版				
<b>教材・参考文献</b>				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 病理学	対象学年 2	学期 前期・ <u>後期</u>	講義方法 <u>講義・実習</u>	担当教員 高井 教行																																													
<b>授業の目標</b> 疾病の形態、機能・代謝の変化を学び、臨床に必要な疾病の鑑別、施術、処置法の基本を理解する。																																																	
<b>授業の概要</b> テキスト・視聴覚教材を用いて疾病の病理、鑑別、施術、処置法について説明する。																																																	
<b>授業計画</b> <table border="0" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%;">第 1 週</td> <td style="width: 20%;">免疫異常</td> <td style="width: 70%;">1) 免疫の仕組み</td> </tr> <tr> <td>第 2 週</td> <td></td> <td>2) 免疫不全、自己免疫異常</td> </tr> <tr> <td>第 3 週</td> <td>アレルギー</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第 4 週</td> <td>腫瘍の一般</td> <td>1) 定義、細胞、組織構造</td> </tr> <tr> <td>第 5 週</td> <td></td> <td>2) 発達、生体への影響</td> </tr> <tr> <td>第 6 週</td> <td></td> <td>3) 発生原因、診断と治療</td> </tr> <tr> <td>第 7 週</td> <td>腫瘍の分類</td> <td>1) 良性腫瘍</td> </tr> <tr> <td>第 8 週</td> <td></td> <td>2) 悪性腫瘍</td> </tr> <tr> <td>第 9 週</td> <td></td> <td>3) 主要な癌</td> </tr> <tr> <td>第 10 週</td> <td>先天性疾患</td> <td>1) 先天性異常</td> </tr> <tr> <td>第 11 週</td> <td></td> <td>2) 奇形の原因</td> </tr> <tr> <td>第 12 週</td> <td></td> <td>3) 奇形形成の時期</td> </tr> <tr> <td>第 13 週</td> <td>運動器の病理</td> <td>1) 骨の病理</td> </tr> <tr> <td>第 14 週</td> <td></td> <td>2) 関節の病理</td> </tr> <tr> <td>第 15 週</td> <td></td> <td>3) 骨格筋の病理</td> </tr> </table>					第 1 週	免疫異常	1) 免疫の仕組み	第 2 週		2) 免疫不全、自己免疫異常	第 3 週	アレルギー		第 4 週	腫瘍の一般	1) 定義、細胞、組織構造	第 5 週		2) 発達、生体への影響	第 6 週		3) 発生原因、診断と治療	第 7 週	腫瘍の分類	1) 良性腫瘍	第 8 週		2) 悪性腫瘍	第 9 週		3) 主要な癌	第 10 週	先天性疾患	1) 先天性異常	第 11 週		2) 奇形の原因	第 12 週		3) 奇形形成の時期	第 13 週	運動器の病理	1) 骨の病理	第 14 週		2) 関節の病理	第 15 週		3) 骨格筋の病理
第 1 週	免疫異常	1) 免疫の仕組み																																															
第 2 週		2) 免疫不全、自己免疫異常																																															
第 3 週	アレルギー																																																
第 4 週	腫瘍の一般	1) 定義、細胞、組織構造																																															
第 5 週		2) 発達、生体への影響																																															
第 6 週		3) 発生原因、診断と治療																																															
第 7 週	腫瘍の分類	1) 良性腫瘍																																															
第 8 週		2) 悪性腫瘍																																															
第 9 週		3) 主要な癌																																															
第 10 週	先天性疾患	1) 先天性異常																																															
第 11 週		2) 奇形の原因																																															
第 12 週		3) 奇形形成の時期																																															
第 13 週	運動器の病理	1) 骨の病理																																															
第 14 週		2) 関節の病理																																															
第 15 週		3) 骨格筋の病理																																															
<b>テキスト</b> 病理学概論：全国柔道整復学校協会 監修 関根一郎 著 医歯薬出版																																																	
<b>教材・参考文献</b>																																																	
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。																																																	
<b>備考</b>																																																	

授業科目 病理学	対象学年 2	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 高井 教行
<b>授業の目標</b> 疾病の形態、機能・代謝の変化を学び、臨床に必要な疾病の鑑別、施術、処置法の基本を理解する。				
<b>授業の概要</b> テキスト・視聴覚教材を用いて疾病の病理、鑑別、施術、処置法について説明する。				
<b>授業計画</b> 第1週 疾病まとめ 第2週 退行性病変まとめ 第3週 代謝障害まとめ 第4週 循環障害まとめ 第5週 進行性病変まとめ 第6週 創傷治癒まとめ 第7週 炎症まとめ① 第8週 炎症まとめ② 第9週 免疫まとめ 第10週 アレルギーまとめ 第11週 腫瘍まとめ① 第12週 腫瘍まとめ② 第13週 先天性異常まとめ 第14週 病因まとめ 第15週 運動器の病理まとめ				
<b>テキスト</b> 病理学概論：全国柔道整復学校協会 監修 関根一郎 著 医歯薬出版				
<b>教材・参考文献</b>				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				

授業科目 一般臨床医学	対象学年 2	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 本庄 浩
<b>授業の目標</b> 診察・診断の進め方や内科的疾患などについての基本的な知識を理解・習得する。				
<b>授業の概要</b> テキストを用いて診察・診断および内科的疾患、臨床現場における基本的な知識について説明する。 また、必要に応じ視聴覚教材を使用する。				
<b>授業計画</b> 第1週 診察の意義・進め方 問診 視診 1) 体格・体型、栄養状態、精神状態 第2週 2) 異常運動、歩行 3) 皮膚の状態 4) 頭部・頸部 5) 胸部・腹部・背部・腰部 6) 四肢 第3週 打診 1) 聴診音の種類 2) 胸部・腹部の打診 第4週 聴診 1) 肺 2) 心臓・腹部 触診 1) 皮膚・皮下組織 2) 骨・関節 3) 胸部・腹部・リンパ節 第5週 生命徴候 1) 体温 2) 血圧 3) 脈拍・呼吸 第6週 知覚検査 1) 表在知覚、深部知覚の検査 2) 複合知覚、その他の知覚検査 第7週 反射検査 1) 種類、表在反射、深部反射 2) 病的反射、自律神経反射 第8週 臨床症状 1) 発熱、出血傾向 2) リンパ節腫脹 3) 意識障害、チアノーゼ 4) 関節痛 第9週 5) 浮腫 6) 肥満とやせ 第10週 検査法 1) 生命徴候の測定 2) 生理機能、検体、運動機能検査 第11週 呼吸器疾患 1) 総論、肺感染症 第12週 2) 呼吸器機能障害、肺循環障害 第13週 3) 肺気腫、気管支・肺・胸郭系の変形および形成障害 第14週 循環器疾患 1) 総論、心臓の疾患 2) 不整脈各論 3) 血圧異常、動脈・静脈疾患、血管痙攣性疾患 第15週 消化器疾患 1) 総論、食道・胃疾患 2) 腸疾患				
<b>テキスト</b> 一般臨床医学：全国柔道整復学校協会 監修 椎名晋一 著 医歯薬出版				
<b>教材・参考文献</b>				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀 (90 点以上)、優 (80 点以上)、良 (70 点以上)、可 (60 点以上)、不可 (60 点未満) とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 一般臨床医学	対象学年 2	学期 前期・ <del>後期</del>	講義方法 <del>講義</del> ・実習	担当教員 本庄 浩
<b>授業の目標</b> 診察・診断の進め方や内科的疾患などについての基本的な知識を理解・習得する。				
<b>授業の概要</b> テキストを用いて診察・診断および内科的疾患、臨床現場における基本的な知識について説明する。 また、必要に応じ視聴覚教材を使用する。				
<b>授業計画</b>  第 1 週 肝・胆・膵疾患 1) 総論、肝疾患 2) 胆道・膵・腹膜疾患 第 2 週 代謝・栄養疾患 1) 総論、糖・脂質・尿酸の代謝異常 2) その他の代謝異常 第 3 週 内分泌疾患甲状腺・副甲状腺疾患副腎疾患 第 4 週 血液・造血疾患 1) 総論、貧血 2) その他の疾患 第 5 週 腎・尿路疾患 第 6 週 神経疾患 1) 総論 2) 脳血管障害、脳・脊髄腫瘍 第 7 週 3) 感染性・痴呆性・基底核変性疾患 第 8 週 4) 末梢神経・脱髄疾患 5) 筋・頸椎疾患 第 9 週 感染症・性病 1) 総論、細菌性、スピロヘータ・真菌・マイコプラズマ 2) ウィルス感染症 第 10 週 リウマチ性疾患・アレルギー性疾患・免疫不全症 第 11 週 1) 総論、リウマチ性疾患 第 12 週 2) 膠原病、遺伝性結合組織炎 第 13 週 環境要因による疾患 第 14 週 各検査の基準値 第 15 週 まとめ				
<b>テキスト</b> 一般臨床医学：全国柔道整復学校協会 監修 椎名晋一 著 医歯薬出版				
<b>教材・参考文献</b>				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀 (90 点以上)、優 (80 点以上)、良 (70 点以上)、可 (60 点以上)、不可 (60 点未満) とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 外科学	対象学年 2	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 廣重 彰二
<b>授業の目標</b> 外科学の基礎および代表的疾患について理解する。				
<b>授業の概要</b> 外科学の基礎となる総論的な事項とともに、日常、臨床の場において遭遇することの多い代表的な外科的疾患について説明する。				
<b>授業計画</b> 第1週 総論 外科学とは、 第2週 損傷および熱傷 第3週 外傷、頭部・ムチ打ち症 胸部・腹部外傷 第4週 感染症、急性および慢性炎症 第5週 腫瘍学総論 ①良性腫瘍 第6週 ②悪性腫瘍 第7週 ショックの病理・輸血および輸液、高カロリー輸液 第8週 滅菌と消毒、手術法 第9週 麻酔法 ①全身麻酔 第10週 ②局所麻酔 第11週 移植と免疫 第12週 蘇生術、出血と止血 第13週 各論 脳神経外科疾患 解剖・生理 第14週 診断法、脳腫瘍 第15週 血管障害、頭部外傷				
<b>テキスト</b> 外科学概論：炭山嘉伸 編 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 標準外科学：武藤輝一・田邊達三 監修、小柳 仁・松野正紀・北島正樹 編集 医学書院				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の結果で評価する。 評価は筆記試験により行い、60/100 点以上を及第（合格）とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 外科学	対象学年 2	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 廣重 彰二																																													
<b>授業の目標</b> 外科学の基礎および代表的疾患について理解する。																																																	
<b>授業の概要</b> 外科学の基礎となる総論的な事項とともに、日常、臨床の場において遭遇することの多い代表的な外科的疾患について説明する。																																																	
<b>授業計画</b> <table border="0" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%;">第 1 週</td> <td style="width: 30%;">各論 胸壁・肺・縦隔疾患</td> <td style="width: 60%;">解剖・生理</td> </tr> <tr> <td>第 2 週</td> <td></td> <td>診断法・手術</td> </tr> <tr> <td>第 3 週</td> <td></td> <td>肺疾患、気胸、血胸、腫傷、外傷</td> </tr> <tr> <td>第 4 週</td> <td>乳腺疾患</td> <td>解剖・生理</td> </tr> <tr> <td>第 5 週</td> <td></td> <td>診断法・疾患</td> </tr> <tr> <td>第 6 週</td> <td>心臓疾患</td> <td>解剖・生理、検査・手術</td> </tr> <tr> <td>第 7 週</td> <td></td> <td>先天性心疾患、後天性心疾患</td> </tr> <tr> <td>第 8 週</td> <td></td> <td>心臓移植、虚血性心疾患</td> </tr> <tr> <td>第 9 週</td> <td>脈管疾患</td> <td>動脈疾患 静脈疾患</td> </tr> <tr> <td>第 10 週</td> <td>腹部外科疾患</td> <td>解剖・生理 主要徴候と病態生理</td> </tr> <tr> <td>第 11 週</td> <td></td> <td>診断法</td> </tr> <tr> <td>第 12 週</td> <td></td> <td>代表的腹部外科疾患①</td> </tr> <tr> <td>第 13 週</td> <td></td> <td>代表的腹部外科疾患①</td> </tr> <tr> <td>第 14 週</td> <td></td> <td>救急医学①</td> </tr> <tr> <td>第 15 週</td> <td></td> <td>救急医学②</td> </tr> </table>					第 1 週	各論 胸壁・肺・縦隔疾患	解剖・生理	第 2 週		診断法・手術	第 3 週		肺疾患、気胸、血胸、腫傷、外傷	第 4 週	乳腺疾患	解剖・生理	第 5 週		診断法・疾患	第 6 週	心臓疾患	解剖・生理、検査・手術	第 7 週		先天性心疾患、後天性心疾患	第 8 週		心臓移植、虚血性心疾患	第 9 週	脈管疾患	動脈疾患 静脈疾患	第 10 週	腹部外科疾患	解剖・生理 主要徴候と病態生理	第 11 週		診断法	第 12 週		代表的腹部外科疾患①	第 13 週		代表的腹部外科疾患①	第 14 週		救急医学①	第 15 週		救急医学②
第 1 週	各論 胸壁・肺・縦隔疾患	解剖・生理																																															
第 2 週		診断法・手術																																															
第 3 週		肺疾患、気胸、血胸、腫傷、外傷																																															
第 4 週	乳腺疾患	解剖・生理																																															
第 5 週		診断法・疾患																																															
第 6 週	心臓疾患	解剖・生理、検査・手術																																															
第 7 週		先天性心疾患、後天性心疾患																																															
第 8 週		心臓移植、虚血性心疾患																																															
第 9 週	脈管疾患	動脈疾患 静脈疾患																																															
第 10 週	腹部外科疾患	解剖・生理 主要徴候と病態生理																																															
第 11 週		診断法																																															
第 12 週		代表的腹部外科疾患①																																															
第 13 週		代表的腹部外科疾患①																																															
第 14 週		救急医学①																																															
第 15 週		救急医学②																																															
<b>テキスト</b> 外科学概論：炭山嘉伸 編 南江堂																																																	
<b>教材・参考文献</b> 標準外科学：武藤輝一・田邊達三 監修、小柳 仁・松野正紀・北島正樹 編集 医学書院																																																	
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の結果で評価する。 定期試験は筆記試験を行い 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。																																																	
<b>備考</b>																																																	

授業科目  整形外科学	対象学年  2	学期  前期・後期	講義方法  講義・実習	担当教員  本庄 浩
<b>授業の目標</b> 臨床の現場に必要な骨・関節・筋・神経などの整形外科領域の疾患についての診断方法、症状、検査法について理解する。				
<b>授業の概要</b> 1. テキストを用いて臨床の現場で骨・関節・筋・神経などの整形外科領域の疾患についての診断方法、症状、検査法について説明する。 2. 必要に応じ X 線、関節造影、CT などの資料を用いて画像読影の実際について説明する。				
<b>授業計画</b> 第 1 週 ガイダンス、整形外科とは 運動器の基礎 1) 骨、関節 第 2 週 2) 筋、神経 第 3 週 診断学 1) 診察法（姿勢、四肢のバランス、計測、他） 第 4 週 2) 画像診断（X 線、関節造影、CT、他）、その他の検査法 第 5 週 治療法 1) 保存療法 第 6 週 2) 観血的療法 第 7 週 全身性の骨・軟部疾患 1) 先天性骨系統疾患、進行性骨化性筋炎 他 第 8 週 2) Ehlers-Danlos 症候群、Paget 病 他 第 9 週 骨・関節損傷総論 1) 骨折総論 第 10 週 2) 関節損傷 第 11 週 スポーツ外傷・障害 第 12 週 感染性疾患 1) 急性化膿性骨髄炎、慢性骨髄炎、 第 13 週 2) Brodie 膿瘍、化膿性関節炎、化膿性筋炎 他 第 14 週 非感染性軟部・関節疾患 1) 軟部組織疾患 第 15 週 2) 関節疾患				
<b>テキスト</b> 整形外科学：安部光俊 著 南江堂				
<b>教材・参考文献</b>				
<b>成績評価の方法</b> 中間試験、定期試験の結果で評価する（中間試験 50%、定期試験 50%）。 なお、評価は筆記試験により行い 100 点満点で 60 点以上のものを及第とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				



授業科目	対象学年	学期	講義方法	担当教員
整形外科学	2	前期・後期	講義・実習	本庄 浩
<b>授業の目標</b> 臨床の現場に必要な骨・関節・筋・神経などの整形外科領域の疾患についての診断方法、症状、検査法について理解する。				
<b>授業の概要</b> 1. テキストを用いて臨床の現場で骨・関節・筋・神経などの整形外科領域の疾患についての診断方法、症状、検査法について説明する。 2. 必要に応じ X 線、関節造影、CT などの資料を用いて画像読影の実際について説明する。				
<b>授業計画</b> 第 1 週 骨端症 第 2 週 神経・筋の系統疾患 第 3 週 骨・軟部腫瘍 1) 骨腫瘍、骨肉種、軟骨肉腫 他 第 4 週 2) 線維性骨異形成症、骨組織球症 他 第 5 週 体幹の疾患 1) 頸部胸郭 第 6 週 2) 胸椎・胸郭 第 7 週 3) 腰椎・骨盤 第 8 週 肩甲帯・上肢の疾患 1) 肩甲帯 第 9 週 2) 肩関節・上腕部 第 10 週 3) 肘関節・前腕部・ 第 11 週 4) 手関節・手部 第 12 週 骨盤・下肢の疾患 1) 骨盤部 第 13 週 2) 股関節・大腿部 第 14 週 3) 膝関節・下腿部 第 15 週 4) 足関節・足部				
<b>テキスト</b> 整形外科学：安部光俊 著 南江堂				
<b>教材・参考文献</b>				
<b>成績評価の方法</b> 中間試験、定期試験の結果で評価する（中間試験 50%、定期試験 50%）。 なお、評価は筆記試験により行い 100 点満点で 60 点以上のものを及第とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目	対象学年	学期	講義方法	担当教員
リハビリテーション医学	2	前期・後期	講義・実習	石井 とも子
<b>授業の目標</b> 外傷や加齢などの影響による症状や障害の程度・予後など臨床に必要な知識・技術を理解する。				
<b>授業の概要</b> テキストを用いて外傷や加齢などの影響による症状や障害の程度・予後などについて説明する。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス、概念と歴史 第2週 リハビリテーション医学の対象（障害の3つのレベル） 第3週 運動の基本（関節の運動、筋とその作用、運動のコントロール） 第4週 四肢・脊柱の機能解剖 第5週 障害学（関節拘縮・変形、筋萎縮、神経麻痺） 第6週 治療学（関節拘縮、筋力増強訓練、バイオフィードバック、痛みの治療） 第7週 評価と診断 1）患者のとらえ方 第8週 2）身体計測、関節可動域測定法 第9週 3）徒手筋力テスト 第10週 4）評価法（中枢性運動障害、痙縮、小児運動発達） 第11週 5）協調性テスト 第12週 6）失認と失行の評価法 第13週 7）心理評価 第14週 8）日常生活動作の評価、電気生理学的診断法 第15週 9）画像診断（CT、MRI）				
<b>テキスト</b> リハビリテーション医学：全国柔道整復学校協会 監修 三上真弘 偏 南江堂				
<b>教材・参考文献</b>				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目	対象学年	学期	講義方法	担当教員
リハビリテーション医学	2	前期・ <u>後期</u>	<u>講義</u> ・実習	石井 とも子
<b>授業の目標</b> 外傷や加齢などの影響による症状や障害の程度・予後など臨床に必要な知識・技術を理解する。				
<b>授業の概要</b> テキストを用いて外傷や加齢などの影響による症状や障害の程度・予後などについて説明する。				
<b>授業計画</b> 第1週 治療法 1) 理学療法 ①運動療法、物理療法 第2週 ②牽引、マッサージ、マニピュレーション 第3週 2) 作業療法 第4週 3) 補装具 ①装具、義肢 第5週 ②移動補助具、自助具と介護機器 第6週 4) 言語治療 第7週 リハビリテーション医学と関連職種 第8週 リハビリテーションの実際 1) 脳卒中 第9週 2) 脊髄損傷 第10週 3) 小児疾患 第11週 4) 切断、末梢神経損傷 第12週 5) 関節リウマチ 第13週 6) 整形外科疾患 第14週 7) 心疾患・呼吸器疾患 第15週 8) 老人のリハビリテーション、リハビリテーションと福祉				
<b>テキスト</b> リハビリテーション医学：全国柔道整復学校協会 監修 三上真弘 偏 南江堂				
<b>教材・参考文献</b>				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀 (90 点以上)、優 (80 点以上)、良 (70 点以上)、可 (60 点以上)、不可 (60 点未満) とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 柔道整復の適応	対象学年 2	学期 前期・ <u>後期</u>	講義方法 <u>講義</u> ・実習	担当教員 森 照明
<b>授業の目標</b> 柔道整復師としての臨床的な判断力を身につけ、臨床所見から判断して施術に適する損傷と、適さない損傷を的確に判断できる能力を学習する。				
<b>授業の概要</b> テキストならびに参考文献を用いて柔道整復の適応範囲について理解を含める。 必要に応じてプリントや映像を使用することにより、理解を深め、国家試験に対する実践力を養う。 また、柔道整復師として必要な判断力や限界を見極める力を身につける。				
<b>授業計画</b> 第1週 施術の適応判断の必要性 第2週 適応の判断 第3週 非適応の判断 第4週 内臓疾患の投影を疑う疼痛 第5週 腰痛を伴う疾患 第6週 血流障害を伴う損傷 第7週 末梢神経損傷を伴う損傷 第8週 脱臼骨折 第9週 外出血を伴う損傷 第10週 病的骨折、病的脱臼 第11週 意識障害を伴う損傷 第12週 脊髄症状のある損傷 第13週 呼吸運動障害を伴う損傷 第14週 高エネルギー外傷 第15週 まとめ				
<b>テキスト</b> 施術の適応と医用画像の理解：全国柔道整復学校協会 監修 細野 昇 川口 央修 編 南江堂				
<b>教材・参考文献</b>				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない100点満点の60点以上を合格とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				

授業科目 社会保障制度	対象学年 3	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 安東 鉄男
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として柔道大会等の現場経験を有し、数多くの外傷治療経験をもつ。専門学校教員として、豊富な経験を活かした整復法や検査法などの実践を担当している。				
<b>授業の目標</b> 社会保障法は、現代の国民の日常生活において欠くことのできない法分野であるとともに、社会保障制度の経済的な役割の大きさのゆえに企業その他の経済主体にとっても重要な意味を持つ法分野である。この講義は、医療保険法(健康保険法、国民健康保険法等)、年金保険法(国民年金法および厚生年金保険法)、および社会福祉サービス法(主として介護保険法)につき、その基本的構造と考え方を習得するとともに、前記各領域で生じる法的問題を解決する能力を養う。あわせて、社会保障制度の現代的課題と政策の動向についても理解を深める。				
<b>授業の概要</b> 1. 教材(後掲のもの)、および適宜与える課題を用いて、学生との質疑応答と議論によって行う。				
<b>授業計画</b> 第1週 I Introduction ・教材、参考書、六法などについて ・社会保障制度の概要 第2週 II 介護保険 介護保険と契約(1) 契約の締結、成年後見 第3週 介護保険と契約(2) 契約と措置との異同 第4週 老人福祉・介護保険の法的問題(1) ・契約内容の変更等 第5週 老人福祉・介護保険の法的問題(2) ・介護事故 第6週 III 社会保険の適用 1. 健康保険・厚生年金の被保険者 ・「労働者」労災保険との関係 第7週 2. 外国人と医療・年金 第8週 IV 公的年金 1. 公的年金の給付(1) ・年金給付の受給権と損害賠償(その1) 第9週 2. 公的年金の給付(2) ・年金給付の受給権と損害賠償(その2) 第10週 3. 離婚時の年金分割 第11週 4. 女性と年金 ・重婚的内縁関係と遺族年金 第12週 V 公的医療保険 1. 公的医療保険の給付(1) ・診療報酬と減点査定 第13週 2. 公的医療保険の給付(2) ・公的医療保険の診療の範囲(その1) 第14週 3. 公的医療保険の給付(3) ・公的医療保険の診療の範囲(その2) 第15週 4. 公的医療保険の財政 ・国民健康保険料(税)と租税法律主義				
<b>テキスト</b> 『社会保障法』				
<b>教材・参考文献</b> 『社会保障法総論〔第2版〕』				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない100点満点の60点以上を合格とする。 秀(90点以上)、優(80点以上)、良(70点以上)、可(60点以上)、不可(60点未満)とする。				

授業科目 関係法規	対象学年 3	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 安東 鉄男
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として柔道大会等の現場経験を有し、数多くの外傷治療経験をもつ。専門学校教員として、豊富な経験を活かした整復法や検査法などの実践を担当している。				
<b>授業の目標</b> 柔道整復師の業務に関連する医療や福祉の法律を理解する。また、社会における柔道整復師のあり方について理解する。				
<b>授業の概要</b> テキストを用いて医療や福祉の法律の基本、柔道整復師の業務に係る法律について説明する。また、柔道整復師の社会的な立場を理解し、学習した内容を業務に反映する態度を養う。				
<b>授業計画</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>第1週 柔道整復師法の目的、定義</li> <li>第2週 免許（柔道整復師免許、免許を受けるための要件、免許の申請）</li> <li>第3週 柔道整復師試験（試験の実施、合格証書と合格証明書）</li> <li>第4週 業務（業務の停止、業務範囲、守秘義務、都道府県知事の指示）</li> <li>第5週 施術所（届出、構造設備、施術所に対する監督）</li> <li>第6週 雑則（広告、経過措置の制定）</li> <li>第7週 罰則（罪刑法定主義、柔道整復師法に定められる罰則、両罰規）</li> <li>第8週 指定登録機関</li> <li>第9週 指定試験機関</li> <li>第10週 附則（免許の特例、受験資格の特例）</li> <li>第11週 医療従事者の身分関係法（医師法、歯科医師法、他）</li> <li>第12週 医療法</li> <li>第13週 薬事法</li> <li>第14週 衛生関係法規、社会福祉関係法規、社会保険関係法規</li> <li>第15週 まとめ</li> </ul>				
<b>テキスト</b> 関係法規：医事法制研究会 監修 全国柔道整復学校協会・医歯薬出版 編 医歯薬出版				
<b>教材・参考文献</b>				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 衛生学・公衆衛生学	対象学年 1	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 工藤 欣邦
<b>授業の目標</b> 国民の健康を守るべき医療人として、国民の健康状態と保健、衛生、福祉の体制を正しく理解し、国民の健康を守るための保健医療サービスと公衆衛生事業のしくみと方法について学習する。				
<b>授業の概要</b> 衛生学・公衆衛生学の歴史や環境保健、産業保健、食品保健、学校保健、精神保健などの各領域における健康現象を取り上げ、その実態から成因・背景・予防対策、残された課題等に関して学びます。				
<b>授業計画</b> 第1週 医の倫理と医療従事者の義務 第2週 保健医療論（地域保健・地域医療） 1) わが国の衛生行政機関の概要、機関の役割、行政の財政 第3週 2) 医療施設・医療保険 第4週 3) 公費（負担）医療、国民医療費 第5週 地域保険と国際保健 1) 地域保険とは 第6週 2) 地域保健活動の特徴 第7週 3) 保健に関する国際協力と世界保健機関 第8週 保健医療論（社会保障制度 障害者福祉） 第9週 母子保健 1) ライフサイクルと母子保健 第10週 2) 母子保健の指標 第11週 学校保健 1) 学校保健の領域と構成、学校保健組織活動 第12週 2) 学校保健・環境管理 第13週 3) 保健教育、保健状況の統計 第14週 精神保健 1) 精神の病気① 第15週 2) 精神の病気②、精神保健活動とその原則				
<b>テキスト</b> 衛生学・公衆衛生学：全国柔道整復学校協会 監修 鈴木庄亮,久 道茂,小川正行 編 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 厚生の指標 国民衛生の動向：財団法人 厚生統計協会				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 衛生学・公衆衛生学	対象学年 1	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 工藤 欣邦
<b>授業の目標</b> 国民の健康を守るべき医療人として、国民の健康状態と保健、衛生、福祉の体制を正しく理解し、国民の健康を守るための保健医療サービスと公衆衛生事業のしくみと方法について学習する。				
<b>授業の概要</b> 衛生学・公衆衛生学の歴史や環境保健、産業保健、食品保健、学校保健、精神保健などの各領域における健康現象を取り上げ、その実態から成因・背景・予防対策、残された課題等に関して学びます。				
<b>授業計画</b> 第1週 環境保健 1) 環境とは 2) 環境問題 3) 物理的環境要因 4) 化学・生物的環境問題 第2週 5) 公害 6) 空気の衛生と大気汚染 7) 環境の測定と評価、環境基準とその設定 第3週 生活環境食品衛生活動 1) 水の衛生と水質汚濁 2) 衣服・住居 3) 食品 第4週 4) 食品衛生活動、栄養改善活動 第5週 感染症の予防 1) 感染症とは 2) 感染症の予防 第6週 消毒法 1) 消毒とは、消毒の種類と方法 2) 消毒法の応用 第7週 産業保健 1) 産業保健の歴史、特徴、動向・対策 2) 物理的環境因子による健康障害 第8週 3) 化学的環境因子による健康障害 4) 職場における健康診断と健康増進 第9週 5) 労働者の生活と余暇、リハビリテーションと職場復帰 第10週 成人・老人保健 1) 成人・老人の健康状態、有訴者率、受療率 2) 成人保健（成人病から生活習慣病） 3) 老人の生活と老人保健・福祉対策 第11週 高齢者について 1) 加齢と老化 2) 生活主観病の特徴と対策 第12週 3) 老人保健福祉対策 4) 介護保険 後期高齢者医療 第13週 疫学 1) 疫学とは、病因、疫学モデル、分類 第13週 2) 調査対象または調査、疾病量の把握、調査方法の選択 第14週 3) 調査の実施と結果の分析、主な統計手法 第15週 まとめ				
<b>テキスト</b> 衛生学・公衆衛生学：全国柔道整復学校協会 監修 鈴木庄亮,久 道茂,小川正行 編 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 厚生指標 国民衛生の動向：財団法人 厚生統計協会				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				



授業科目 医療倫理と保険請求	対象学年 3	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 安東 鉄男
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として柔道大会等の現場経験を有し、数多くの外傷治療経験をもつ。専門学校教員として、豊富な経験を活かした整復法や検査法などの実践を担当している。				
<b>授業の目標</b> 1. 各関節・部位の軟部組織損傷との鑑別診断上重要な疾患について理解する。 2. 柔整業務内での外傷・障害の取り扱い、治療方法や指導内容について理解する。				
<b>授業の概要</b> 1. 資料を用いて外傷と障害及び鑑別診断上重要な疾患について説明する。 2. 講義は「整形外科学」をベースに考察し、外傷と障害の基本および柔道整復業務範囲内での処置法や指導内容について説明する。 3. 視覚に訴えたほうが良いと思われる内容では人体模型やスライド・OHP などの機材を使用する。				
<b>授業計画</b> 第1週 導入 医療倫理の必要性 第2週 生命倫理・医療倫理 生命倫理の方法と医療倫理 バイオエシックス 第3週 生命倫理の四原則 ジュネーブ宣言 医の倫理綱領 第4週 患者の権利と生命倫理① リスボン宣言 患者の権利章典 第5週 WHO 憲章 世界人権宣言 アルマ・アタ宣言 第6週 マドリッド宣言 オタワ憲章 第7週 患者の権利と生命倫理② 患者中心の医療とチーム医療 医療者と患者関係におけるコミュニケーション 第8週 薬害と生命倫理 第9週 生殖医学と生命倫理 生殖技術 クローン技術 出生前診断 ES・iPS 細胞 人工妊娠中絶 第10週 脳死・臓器移植と生命倫理 死 死亡判定基 脳死 脳死判定基準 移植医療 第11週 終末期医療と生命倫理 終末期医療とは 延命と QOL 安楽死 尊厳死 緩和ケア 輸血拒否 第12週 医療保険制度の目的と歴史 第13週 健康保険と療養費 第14週 現金給付と現物給付 第15週 受領委任払い方式と償還払い方式				
<b>テキスト</b> 医療倫理と保険請求（南江堂）				
<b>教材・参考文献</b> 1. 医療概論（医歯薬出版）				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b> 1. 予習・復習を行うこと。 2. 講義内容について不明な点は放置せず積極的に質問すること。 3. 講義中の私語は他の学生の集中や理解を妨げとなるので慎む。				

授業科目  柔 道	対象学年  1 年	学期  前期・後期	講義方法  講義・実習	担当教員  実務経験者（柔道整復師） 安 東 鉄 男
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として柔道大会等の現場経験を有し、数多くの外傷治療経験をもつ。専門学校教員として、豊富な経験を活かした整復法や検査法などの実践を担当している。				
<b>授業の目標</b> 柔道整復師のルーツである柔道の精神、歴史を学ぶ。柔道の基本動作を身につける。				
<b>授業の概要</b> 1. 柔道の精神、歴史を理解させる。 2. 柔道の技術、審判規定を理解させる。 3. 礼法や受身などの基本動作を習得させる。				
<b>授業計画</b> 第 1 週 柔道の精神、歴史 第 2 週 礼法「立礼」「座礼」 受身「後ろ受身」 第 3 週 礼法「立礼」「座礼」 受身「後ろ受身」「横受身」 第 4 週 礼法「立礼」「座礼」 受身「後ろ受身」「横受身」 第 5 週 礼法「立礼」「座礼」 受身「後ろ受身」「横受身」「前廻り受身」 第 6 週 既習技の復習 第 7 週 投技 立技 1)「大腰」 第 8 週 2)「大外刈」 第 9 週 3)「大内刈」 第 10 週 寝技 抑技 1)「袈裟固」 第 11 週 2)「横四方固」 第 12 週 3)「上四方固」 第 13 週 絞技 1)「裸絞」 第 14 週 2)「送襟絞」 第 15 週 既習技の復習				
<b>テキスト</b>				
<b>教材・参考文献</b> ビデオ 講道館監修「術から道へ」「柔道上巻」「柔道下巻」				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験による。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目  柔 道	対象学年  1 年	学期  前期・後期	講義方法  講義・実習	担当教員  実務経験者（柔道整復師） 重石 雄大
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院に勤務し、外傷治療の経験を有する。その後、専門学校教員として上肢骨折の講義や実技を担当している。				
<b>授業の目標</b> 柔道整復師のルーツである柔道の精神、歴史を学ぶ。柔道の基本動作を身につける。				
<b>授業の概要</b> 1. 柔道の精神、歴史を理解させる。 2. 柔道の技術、審判規定を理解させる。 3. 礼法や受身、投技、固技などの基本動作を習得させる。				
<b>授業計画</b> 第1週 投技 立技 4)「背負投」 第2週 5)「払腰」 第3週 6)「支釣込足」 第4週 寝技 抑技 4)「肩固」 第5週 絞技 3)「片羽絞」 第6週 既習技の復習 第7週 連続技 1)「大内刈」～「大外刈」 第8週 連続技 2)「大外刈」～「大内刈」 第9週 連続技 3)「大内刈」～「大腰」 第10週 連続技 4)「大内刈」～「袈裟固」 「大外刈」～「袈裟固」 第11週 連続技 5)「大外刈」～「支釣込足」 第12週 既習技の復習 乱取 第13週 既習技の復習 乱取 第14週 既習技の復習 乱取 第15週 既習技の復習 乱取				
<b>テキスト</b>				
<b>教材・参考文献</b> 講道館柔道試合審判規定				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験による 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目  柔 道	対象学年  2 年	学期  前期・後期	講義方法  講義・実習	担当教員  実務経験者（柔道整復師） 中尾 幸雄
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整形外科や整骨院での実務経験を有する。専門学校教員として人体の構造や機能等、柔道整復学を学ぶに当たっての基礎となる科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 柔道整復師のルーツである柔道の精神、歴史を学ぶ。柔道の基本動作を身につける。				
<b>授業の概要</b> 1. 柔道の精神、歴史を理解させる。 2. 柔道の技術、審判規定を理解させる。 3. 礼法や受身、投技、固技などの基本動作を習得させる。 4. 「投の形」を習得させる。				
<b>授業計画</b> 第 1 週 投の形 手技 1) 「浮 落」(右) 第 2 週 「浮 落」(左) 第 3 週 2) 「背負投」(右) 第 4 週 「背負投」(左) 第 5 週 3) 「肩 車」(右) 第 6 週 「肩 車」(左) 第 7 週 手技復習（手技 3 本を通して行う） 第 8 週 投の形 腰技 1) 「浮 腰」(右) 第 9 週 「浮 腰」(左) 第 10 週 2) 「払 腰」(右) 第 11 週 「払 腰」(左) 第 12 週 3) 「釣込腰」(右) 第 13 週 「釣込腰」(左) 第 14 週 腰技復習（腰技 3 本を通して行う） 第 15 週 手技・腰技復習				
<b>テキスト</b>				
<b>教材・参考文献</b> ビデオ 講道館監修「投の形」				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験による 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目  柔 道	対象学年  2 年	学期  前期 <u>後期</u>	講義方法  講義・ <u>実習</u>	担当教員  実務経験者（柔道整復師）  中尾 幸雄
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整形外科や整骨院での実務経験を有する。専門学校教員として人体の構造や機能等、柔道整復学を学ぶに当たっての基礎となる科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 柔道整復師のルーツである柔道の精神、歴史を学ぶ。柔道の基本動作を身につける。				
<b>授業の概要</b> 1. 柔道の精神、歴史を理解させる。 2. 柔道の技術、審判規定を理解させる。 3. 礼法や受身、投技、固技などの基本動作を習得させる。 4. 「投の形」を習得させる。				
<b>授業計画</b> 第1週 投の形 足技 1) 「送足払」(右) 第2週 「送足払」(左) 第3週 2) 「支釣込足」(右) 第4週 「支釣込足」(左) 第5週 3) 「内 股」(右) 第6週 「内 股」(左) 第7週 足技復習（足技3本を通して行う） 第8週 腰技・足技復習 第9週 手技復習 第10週 腰技復習 第11週 足技復習 第12週 手技・腰技・足技復習 1) 手技3本、腰技3本、足技3本を通して行う 第13週 2) 手技3本、腰技3本、足技3本を通して行う 第14週 3) 手技3本、腰技3本、足技3本を通して行う 第15週 まとめ				
<b>テキスト</b>				
<b>教材・参考文献</b> ビデオ 講道館監修「投の形」				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験による 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目  柔 道	対象学年  3 年	学期  前期・後期	講義方法  講義・実習	担当教員  実務経験者（柔道整復師） 重石 雄大
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院に勤務し、外傷治療の経験を有する。その後、専門学校教員として上肢骨折の講義や実技を担当している。				
<b>授業の目標</b> 柔道整復師のルーツである柔道の精神、歴史を学ぶ。柔道の基本動作を身につける。				
<b>授業の概要</b> 1. 柔道の精神、歴史を理解させる。 2. 柔道の技術、審判規定を理解させる。 3. 礼法や受身、投技、固技などの基本動作を習得させる。 4. 「投の形」を習得させる。				
<b>授業計画</b> 第1週 投技 立技 7) 「体落」 第2週 8) 「出足払」 第3週 9) 「膝車」 第4週 10) 「小内刈」 第5週 11) 「小外刈」 第6週 応用 1) 「乱取」中心の実践的な練習 第7週 2) 「乱取」中心の実践的な練習 第8週 3) 「乱取」中心の実践的な練習 第9週 投の形 手技復習（手技3本を通して行う） 第10週 腰技復習（腰技3本を通して行う） 第11週 足技復習（足技3本を通して行う） 第12週 手技・腰技・足技復習（各3本ずつ通して行う） 第13週 手技・腰技・足技復習（各3本ずつ通して行う） 第14週 手技・腰技・足技復習（各3本ずつ通して行う） 第15週 まとめ				
<b>テキスト</b>				
<b>教材・参考文献</b> ビデオ 講道館監修「投の形」				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験による 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

## 専門分野

授業科目 柔道整復理論 I	対象学年 1	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 中尾 幸雄
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整形外科や整骨院での実務経験を有する。専門学校教員として人体の構造や機能等、柔道整復学を学ぶに当たっての基礎となる科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 1. 柔道整復の専門基礎・専門科目の習得に必要な基本的な用語を理解する。 2. 生体の観察・計測等に必要な基本的知識について理解する。				
<b>授業の概要</b> 1. 柔道整復の専門基礎・専門科目の習得に最小限度必要な人体に関わる用語、解剖学用語、柔整・整形外科用語、医学臨床用語の基礎知識について説明する。 2. プリント、スライド等を必要に応じ配布または使用する。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス 第2週 柔道整復師および柔道整復師の沿革（発祥から現代まで） 第3週 業務範囲について 第4週 人体に加わる力 1) 静力学的荷重 2) 静力学的能動力 3) 静力学負荷変形 第5週 身体の基礎的状态 1) 年齢 2) 性別 3) 栄養状態 4) 姿勢、体型 5) 四肢の形態とそれに伴う状態 6) 体位、肢位 第6週 7) 動きに反応する速さの個人差 8) 情報の遮断 9) 他疾患による各組織の病的状態および弱 第7週 損傷時に加わる力 1) 急性 2) 亜急性 第8週 3) 直達外力 4) 介達外力 5) 骨の構造 第9週 確認小テストと理解度の確認 第10週 骨損傷の概説 1) 骨の性状による分類 2) 骨損傷の程度による分類 第11週 3) 骨折線の方向による分類 4) 骨折の数による分類 5) 外創との交通 第12週 外力の働き方による分類 1) ～8) 分類 骨折の経過による分類 第13週 骨折時の局所症状 炎症の5大徴候をもとに 第14週 骨折の固有症状 1) 異状可動性 2) 軋轢音 3) 転位と変形 第15週 骨折時の全身症状 1) ショック 2) 発熱				
<b>テキスト</b> 柔道整復学（理論編）：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 1. 解剖学：岸 清・石塚 寛 編 医歯薬出版 2. 標準整形外科学：医学書院 3. 柔道整復学（理論編）：社団法人 全国柔道整復学校協会・教科書委員会 編集 南江堂				
<b>成績評価の方法</b> 中間試験、定期試験の結果で評価する（中間50%、定期試験50%）。 評価は筆記試験により行い、60/100点以上を及第（合格）とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b> 配布したプリント、参考文献1・2を毎時間持参する。				



授業科目 柔道整復理論 I	対象学年 1	学期 前期・ <u>後期</u>	講義方法 <u>講義</u> ・実習	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 中尾 幸雄
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整形外科や整骨院での実務経験を有する。専門学校教員として人体の構造や機能等、柔道整復学を学ぶに当たっての基礎となる科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 1. 柔道整復術および柔道整復師の沿革について理解する。 2. 柔道整復術の概要、人体に加わる力、損傷に対する身体の基礎的状态ならびに損傷時に加わる力について理解する。				
<b>授業の概要</b> 1. テキストを用いてそれぞれのテーマについて説明する。 2. 柔道整復術、柔道整復師ならびに損傷発生の基本的なメカニズムについて説明する。 3. 必要に応じプリント、視聴覚教材を配布・使用する。				
<b>授業計画</b> 第 1 週 ガイダンス、柔道整復とは 第 2 週 柔道整復術および柔道整復師の沿革 1) 医療の起源と発展、柔道整復の基本概念の成立、海外との交流 第 3 週      2) 江戸時代前期～戦後（第二次世界大戦） 第 4 週      3) 柔道整復師法の成立、国家試験への移行、指導要領の制定 第 5 週 柔道整復師と柔道   1) 柔道と徒手整復術 第 6 週                      2) 柔術の活法 第 7 週                      3) 柔術の起源と発達 第 8 週                      4) 柔道の創設と発展 第 9 週                      5) 嘉納治五郎と教育 第 10 週 業務範囲と心得   1) 条文、指導要領、柔道整復術、業務禁止と施術制限 第 11 週                      2) 権能と施術制限、業務範囲と施術限界、X 線と附帯決議、他 第 12 週 柔道整復術とは 第 13 週 人体に加わる力 第 14 週 損傷に関する身体の基礎的状态 第 15 週 損傷時に加わる力				
<b>テキスト</b> 柔道整復学（理論編）：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂				
<b>教材・参考文献</b>				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				

<b>授業科目</b>  柔道整復理論Ⅱ	<b>対象学年</b>  1	<b>学期</b>  前期・後期	<b>講義方法</b>  講義・実習	<b>担当教員</b> 実務経験者（柔道整復師） 重石 雄大
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院に勤務し、外傷治療の経験を有する。その後、専門学校教員として上肢骨折の講義や実技を担当している。				
<b>授業の目標</b> 1. 柔道整復の基本的な知識・技術を習得させる。 2. 上肢の骨折の各論を習得させる。				
<b>授業の概要</b> 1. テキスト用いて上肢骨折の各部位の骨折の特徴・整復法・固定法などを学習する。 2. 臨床的ないろいろなケースを想定し対処方法を学習する。 3. 写真、資料を用いて多くの症例の評価法と治療法を学習する。				
<b>授業計画</b> 第1週 頭部、顔面の骨折 第2週 肋骨骨折、肋軟骨骨折 第3週 胸骨骨折 第4週 脊椎骨折（頸椎、胸椎、腰椎） 第5週 鎖骨骨折 第6週 鎖骨骨折 第7週 肩甲骨骨折 第8週 肩甲骨骨折 第9週 上腕骨近位端部骨折 第10週 上腕骨近位端部骨折 第11週 上腕骨骨幹部骨折 第12週 上腕骨遠位端部骨折 第13週 上腕骨遠位端部骨折（顆上、外顆、内側上顆） 第14週 上腕骨遠位端部骨折（類症鑑別、合併症） 第15週 総復習				
<b>テキスト</b> 柔道整復学 理論編 南江堂 監修 社）全国柔道整復学校協会 柔道整復学 実技編 南江堂 監修 社）全国柔道整復学校協会				
<b>教材・参考文献</b> 標準整形外科学 医学書院 監修 石井清一 平澤泰介 上肢骨折の保存療法 医歯薬出版 著 武田功 竹内義享 大村晋司				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の結果で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行い 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 柔道整復理論Ⅱ	対象学年 2	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 重石 雄大
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院に勤務し、外傷治療の経験を有する。その後、専門学校教員として上肢骨折の講義や実技を担当している。				
<b>授業の目標</b> 1. 柔道整復の基本的な知識・技術を習得させる。 2. 上肢の骨折の各論を習得させる。				
<b>授業の概要</b> 1. テキストを用いて上肢骨折の各部位の骨折の特徴・整復法・固定法などを学習する。 2. 臨床的ないろいろなケースを想定し対処方法を学習する。 3. 写真、資料を用いて多くの症例の評価法と治療法を学習する。				
<b>授業計画</b> 第1週 橈骨近位端部骨折 第2週 肘頭骨折 第3週 橈骨骨幹部単独骨折 第4週 Galeazzi 骨折 第5週 尺骨骨幹部単独骨折 第6週 Monteggia 骨折（伸展型） 第7週 Monteggia 骨折（屈曲型） 第8週 橈尺両骨骨幹部骨折 第9週 前腕遠位端部骨折 第10週 Colles 骨折 第11週 Colles 骨折 第12週 Smith 骨折 第13週 背側・掌側 Barton 骨折、Chauffeur 骨折 第14週 前腕骨遠位端部骨端線離開 第15週 総復習				
<b>テキスト</b> 柔道整復学 理論編 南江堂 監修 社）全国柔道整復学校協会 柔道整復学 実技編 南江堂 監修 社）全国柔道整復学校協会				
<b>教材・参考文献</b> 標準整形外科学 医学書院 監修 石井清一 平澤泰介 上肢骨折の保存療法 医歯薬出版 著 武田功 竹内義享 大村晋司				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の結果で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行い 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				

<b>授業科目</b> 柔道整復理論Ⅲ	<b>対象学年</b> 2	<b>学期</b> 前期・後期	<b>講義方法</b> 講義・実習	<b>担当教員</b> 実務経験者（柔道整復師） 奈須 崇倫
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師としてスポーツ現場等、多くの臨床経験を有する。専門学校教員として、臨床現場での基礎となる実技や疾病に関する科目を担当する。				
<b>授業の目標</b> 下肢に発生する骨折の発生機序、分類、症状、合併症、整復法、固定法、後療法等の基本的な内容について理解する。				
<b>授業の概要</b> テキストを用いて下肢・体幹に発生する骨折の基本的な内容について説明する。 説明には必要に応じプリント、視聴覚機器を配布または使用する。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス、下肢に発生する骨折の概要 第2週 下肢の筋（骨盤、大腿～膝） 第3週 下肢の筋（膝～下腿～足指） 第4週 骨盤骨骨折 ①骨盤骨単独骨折 第5週 骨盤骨骨折 ②骨盤骨環骨折 第6週 大腿骨近位端部骨折 ①大腿骨骨頭部骨折 第7週 大腿骨近位端部骨折 ②大腿骨頸部骨折Ⅰ 第8週 大腿骨近位端部骨折 ②大腿骨頸部骨折Ⅱ 大転子、小転子骨折 第9週 大腿骨骨幹部骨折Ⅰ 第10週 大腿骨骨幹部骨折Ⅱ 第11週 大腿骨遠位端部骨折 ①大腿骨顆上骨折 第12週 大腿骨遠位端部骨折 ②大腿骨遠位端骨端線離開 第13週 大腿骨遠位端部骨折 ③大腿骨顆部骨折 第14週 大腿骨遠位端部骨折 ④内側側副靭帯剥離骨折 ⑤膝蓋骨骨折Ⅰ 第15週 大腿骨遠位端部骨折 ⑤膝蓋骨骨折Ⅱ				
<b>テキスト</b> 柔道整復学（理論編）：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 柔道整復学（実技編）：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂 包帯固定学：全国柔道整復学校協会 監修 阿部 光俊 著 南江堂 整形外科学：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂 標準整形外科学：寺山 和雄、辻 陽雄 監修 医学書院				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験（中間試験、期末試験）による評価を行う 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

<b>授業科目</b> 柔道整復理論Ⅲ	<b>対象学年</b> 2	<b>学期</b> 前期・後期	<b>講義方法</b> 講義・実習	<b>担当教員</b> 実務経験者（柔道整復師） 奈須 崇倫
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師としてスポーツ現場等、多くの臨床経験を有する。専門学校教員として、臨床現場での基礎となる実技や疾病に関する科目を担当する。				
<b>授業の目標</b> 下肢に発生する骨折の発生機序、分類、症状、合併症、整復法、固定法、後療法等の基本的な内容について理解する。				
<b>授業の概要</b> テキストを用いて下肢・体幹に発生する骨折の基本的な内容について説明する。 説明には必要に応じプリント、視聴覚機器を配布または使用する。				
<b>授業計画</b> 第1週 下腿骨骨折 近位骨端部骨折 ①脛骨顆部骨折 第2週 下腿骨骨折 近位骨端部骨折 ②脛骨顆間隆起骨折 第3週 下腿骨骨折 近位骨端部骨折 ③脛骨粗面骨折 腓骨頭単独骨折 第4週 下腿骨骨折 骨幹部骨折 ①脛腓単独骨折 脛腓両骨骨折Ⅰ 第5週 下腿骨骨折 骨幹部骨折 ①脛腓単独骨折 脛腓両骨骨折Ⅱ 第6週 下腿骨骨折 骨幹部骨折 ①脛腓単独骨折 脛腓両骨骨折Ⅱ ②腓骨頭単独骨折 第7週 下腿骨骨折 骨幹部骨折 ③果上骨折 第8週 下腿骨骨折 遠位端部骨折 ①果部骨折Ⅰ 第9週 下腿骨骨折 遠位端部骨折 ①果部骨折Ⅱ 第10週 足・足指骨骨折 ①距骨骨折 第11週 足・足指骨骨折 ②踵骨骨折 第12週 足・足指骨骨折 ③舟状骨骨折 第13週 足・足指骨骨折 ④立方骨骨折 ⑤楔状骨骨折 第14週 中足骨骨折Ⅰ 第15週 中足骨骨折Ⅱ 足指骨骨折				
<b>テキスト</b> 柔道整復学（理論編）：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 柔道整復学（実技編）：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂 包帯固定学：全国柔道整復学校協会 監修 阿部 光俊 著 南江堂 整形外科学：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂 標準整形外学：寺山 和雄、辻 陽雄 監修 医学書院				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験（中間試験、期末試験）による評価を行う 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

<p>授業科目 柔道整復理論Ⅳ</p>	<p>対象学年 1</p>	<p>学期 後期</p>	<p>講義方法 講義</p>	<p>担当教員 実務経験者（柔道整復師） 宮迫宏治</p>
<p><b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として豊富な治療経験を有し、様々な症状の患者と接する。専門学校教員として、人体の動きの基礎となる学問などを担当している。</p>				
<p><b>授業の目標</b> 1. 上肢〈体幹含む〉の脱臼について理解する 2. 各論の徹底理解</p>				
<p><b>授業の概要</b> 具体的に臨床を混ぜながら解説していく</p>				
<p><b>授業計画</b></p> <p>第1週 顎関節脱臼の特徴と分類、前方脱臼について。 第2週 整復法、後方脱臼、側方脱臼について 第3週 鎖骨の脱臼の説明。 胸鎖関節脱臼について 第4週 肩鎖関節脱臼について 第5週 肩関節脱臼全般についての導入 第6週 肩関節前方脱臼について 第7週 肩関節後方脱臼、肩関節下方脱臼について 第8週 まとめ 第9週 肩関節上方脱臼について 第10週 肩関節脱臼の整復法について 第11週 肘関節脱臼全般についての導入 第12週 前腕両骨後方脱臼について 第13週 前腕両骨前方脱臼、前腕両骨外側脱臼について 第14週 前腕両骨内側脱臼、前腕両骨分散脱臼について 第15週 総復習</p>				
<p><b>テキスト</b> 柔道整復学（理論編）全国柔道整復学校協会 監修 南江堂</p>				
<p><b>教材・参考文献</b> 1. 解剖学講義 伊藤 隆 著 南山堂、 2. 標準整形外科学 石井清一 平澤泰介 監修 医学書院</p>				
<p><b>成績評価の方法</b> 中間期末考査と小テストにて 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。</p>				
<p><b>備考</b> 学生に、楽しく、興味を持たせながら授業を進める。</p>				

<b>授業科目</b> 柔道整復理論Ⅳ	<b>対象学年</b> 2	<b>学期</b> 前期	<b>講義方法</b> 講義	<b>担当教員</b> 実務経験者（柔道整復師） 宮迫宏治
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として豊富な治療経験を有し、様々な症状の患者と接する。専門学校教員として、人体の動きの基礎となる学問などを担当している。				
<b>授業の目標</b> 各論の専門的知識を臨床と織り交ぜながら理解させる。				
<b>授業の概要</b> 1. 黒板に教科書に載っていない捕捉を書く。 2. 図を用いて、分かりやすく説明する。				
<b>授業計画</b>  第 1 週 橈骨頭単独脱臼、肘内障について 第 2 週 手関節・手指部の脱臼の導入。遠位橈尺関節の脱臼、橈骨手根関節の脱臼について 第 3 週 月状骨脱臼、月状骨周囲脱臼について 第 4 週 手根中手関節脱臼、第 1 中手指節関節脱臼、第 1 指以外の中手指節関節脱臼について 第 5 週 近位指節間関節脱臼について 第 6 週 遠位指節間関節脱臼について 第 7 週 股関節脱臼導入、後方脱臼について 第 8 週 まとめ 第 9 週 股関節前方脱臼・中心性脱臼について 第 10 週 膝蓋骨脱臼について 第 11 週 膝関節脱臼全般と前方脱臼について 第 12 週 膝関節後方脱臼・側方脱臼・回旋脱臼について 第 13 週 ショパール関節脱臼について 第 14 週 中足、足指部の脱臼について 第 15 週 総復習				
<b>テキスト</b> 柔道整復学（理論編）全国柔道整復学校協会 監修 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 1. 解剖学講義 伊藤 隆 著 南山堂、 2. 標準整形外科学 石井清一 平澤泰介 監修 医学書院				
<b>成績評価の方法</b> 中間期末考査と小テスト 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b> いつも明るく楽しく、学生に興味を持たせながらやる				

<b>授業科目</b> 柔道整復理論 V	<b>対象学年</b> 1	<b>学期</b> 前期・(後期)	<b>講義方法</b> (講義)・実習	<b>担当教員</b> 実務経験者（柔道整復師） 安東 鉄男
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として柔道大会等の現場経験を有し、数多くの外傷治療経験をもつ。専門学校教員として、豊富な経験を活かした整復法や検査法などの実践を担当している。				
<b>授業の目標</b> 1 学年次の軟部組織損傷（総論）の基礎の上に、2 学年次の各論で日常生活やスポーツなどで上肢、下肢、体幹に発生する一般的な軟部組織損傷・疾患の実際を理解する。				
<b>授業の概要</b> 1. 「柔道整復理論」をテキストとして使用する。 2. 担当教員が日常生活やスポーツなどで上肢、下肢、体幹に発生する一般的な軟部組織損傷・疾患の発生機序、症状、治療法、予後、鑑別診断を説明する。				
<b>授業計画</b> 第 1 週 頭部、顔面の軟部組織損傷 A. 顎関節症 第 2 週 胸部の軟部組織損傷 A. 胸肋関節損傷 B. 肋間筋損傷 第 3 週 脊椎の軟部組織損傷 A. 頸部捻挫 B. 頸部の疾患 第 4 週 " C. 胸背部の軟損 D. 腰部の軟損 第 5 週 " E. 腰部の疾患 第 6 週 上肢の軟部組織損傷 A. 肩部の軟損 ①腱板の損傷 第 7 週 " ②上腕二頭筋長頭腱損傷 ③疼痛と運動制限を伴う肩 第 8 週 " ③疼痛と運動制限を伴う肩 ④持続性の異常感覚を生じる肩 第 9 週 " ⑤スポーツによる障害 ⑥鑑別診断を要する類症 第 10 週 " B. 上腕部の軟部組織損傷 第 11 週 " C. 肘部の軟部組織損傷 ①内側上顆炎 ②外側上顆炎 ③内側側副靭帯損傷 第 12 週 " D. 前腕部の軟部組織損傷 第 13 週 " E. 手関節・手指部の軟部組織損傷 ①遠位橈尺関節の損傷 ②手関節・手指部の損傷 ③指の損傷 第 14 週 " F. 手関節・手指部の変形および腱損傷①マーデンベルグ変形 ②デュビュイトレイ ン拘縮 ③ド・ケルバン病 ④ばね指 第 15 週 " ⑤ヘバーデン結節 ⑥ボタン穴変形 ⑦マレットフィンガー ⑧スワンネック変形				
<b>テキスト</b> 「柔道整復理論」：(社) 全国柔道整復学校協会 監修南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 標準整形外科学 医学書院				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験（中間試験、期末試験）による 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				



<b>授業科目</b> 柔道整復理論 V	<b>対象学年</b> 2	<b>学期</b> 前期・後期	<b>講義方法</b> 講義・実習	<b>担当教員</b> 実務経験者（柔道整復師） 安東 鉄男
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として柔道大会等の現場経験を有し、数多くの外傷治療経験をもつ。専門学校教員として、豊富な経験を活かした整復法や検査法などの実践を担当している。				
<b>授業の目標</b> 1 学年次の軟部組織損傷（総論）の基礎の上に、2 学年次の各論で日常生活やスポーツなどで上肢、下肢、体幹に発生する一般的な軟部組織損傷・疾患の実際を理解する。				
<b>授業の概要</b> 1. 「柔道整復理論」をテキストとして使用する。 2. 担当教員が日常生活やスポーツなどで上肢、下肢、体幹に発生する一般的な軟部組織損傷・疾患の発生機序、症状、治療法、予後、鑑別診断を説明する。				
<b>授業計画</b> 第 1 週 A. 股関節の軟部組織損傷 ①股関節部におけるいわゆる捻挫などに伴う疼痛、拘縮、跛行 第 2 週 B. 大腿部の軟部組織損傷 ①大腿四頭筋損傷 ②ハムストリングス損傷 第 3 週 C. 膝関節部の軟部組織損傷 第 4 週 D. 下腿部の軟部組織損傷 ①下腿三頭筋損傷 第 5 週 " ②コンパートメント症候群 第 6 週 " ③アキレス腱断裂 第 7 週 " ④アキレス腱炎・周囲炎 第 8 週 " ⑤踵骨、アキレス腱間滑液包炎 第 9 週 E. 足部の軟部組織損傷 ①距腿関節の損傷 第 10 週 " ②Chopart 関節の損傷 ③リスフラン関節損傷 第 11 週 " ④足指部の損傷 第 12 週 " ⑤足部の変形 第 13 週 " ⑥足指の変形 第 14 週 " ⑦腓骨筋腱脱臼 ⑧足根管症候群 第 15 週 " ⑨足底腱膜炎 ⑩中足部痛				
<b>テキスト</b> 「柔道整復理論」（社）全国柔道整復学校協会 監修 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 標準整形外科学 医学書院				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験（中間試験、期末試験）による 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 臨床柔道整復学 I	対象学年 2	学期 後期	講義方法 講義	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 宮迫宏治
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として豊富な治療経験を有し、様々な症状の患者と接する。専門学校教員として、人体の動きの基礎となる学問などを担当している。				
<b>授業の目標</b> 習った事をより広い学問と絡めながら、多角的に見ていく 自分で考えて、創造的な解釈をする訓練をする。				
<b>授業の概要</b> リハビリテーションとの関わりを教える。 人の体について、どのように関節が動くかを教える。 筋肉や骨などの生理学的解剖を絡めて教える。				
<b>授業計画</b> 第 1 週 リハビリテーションの概念。柔道整復学とリハビリテーションの実践 第 2 週 機能形態障害に対するアプローチ。症状と実際の心理状況。 第 3 週 筋肉の状態と外傷の理論。腰痛とリハビリテーション。 第 4 週 頸椎捻挫とリハビリテーション。腱鞘炎とリハビリテーション。 第 5 週 足関節捻挫とリハビリテーション。膝関節損傷とリハビリテーション。 第 6 週 肩関節脱臼とリハビリテーション。股関節脱臼とリハビリテーション。 第 7 週 指関節の脱臼とリハビリテーション。まとめ。 第 8 週 腰痛に関する装具。膝関節損傷に関する装具。 第 9 週 頸椎脱臼損傷に対するリハビリの考察。頸椎損傷に対する装具。 第 10 週 頸椎損傷の予後。肩関節の運動学と整復学。 第 11 週 肘関節の運動学と整復学。股関節の運動学と整復学。 第 12 週 足関節の運動学と整復学。神経の構造と障害学。 第 13 週 姿勢と痛みの関連性。 第 14 週 歩行分析学。歩行とエネルギー消費。 第 15 週 総復習				
<b>テキスト</b> 運動学 斎藤 宏 著 医歯薬出版株式会社 リハビリテーション 三上 真弘 編 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 解剖学講義 伊藤 隆 著 南山堂、 標準整形外科学 石井清一 平澤泰介 監修 医学書院 基本生理学 坂東武彦 小山省三 監訳 西村書店				
<b>成績評価の方法</b> 中間期末考査と小テスト・授業中の実技の成績 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b> いつも明るく楽しく、学生に興味を持たせながらやる				

<b>授業科目</b> 臨床柔道整復学Ⅱ	<b>対象学年</b> 2	<b>学期</b> 前期・後期	<b>講義方法</b> 講義・実習	<b>担当教員</b> 実務経験者（柔道整復師） 安東鉄男
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として柔道大会等の現場経験を有し、数多くの外傷治療経験をもつ。専門学校教員として、豊富な経験を活かした整復法や検査法などの実践を担当している。				
<b>授業の目標</b> 骨・関節・軟部組織損傷の評価・判定に用いる超音波・X線等・その他の画像診断について、装置の構造、動作原理と特性、検査法など基本的な知識を習得する。 また、各装置で撮影した画像を見ることで外傷・障害の実際について理解する。				
<b>授業の概要</b> 1. 教員が配布する資料をもとに、超音波画像診断装置を中心に各種診断装置の構造、動作原理と特性、検査法など基本的な項目について説明する。 2. 各装置で撮影した画像を見ることで骨・関節・軟部組織損傷に発生する外傷・障害の実際について知識を深める。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス、画像診断の目的・必要性 第2週 超音波装置 1) 装置・診断の歴史、装置の基礎（構造、動作原理と特性） 第3週 2) 画像の基礎 第4週 3) 検査方法 第5週 4) 画像の実際 ①骨・関節の損傷 第6週 5) 画像の実際 ②軟部組織の損傷 第7週 X 線 1) 装置・診断の歴史、装置の基礎（構造、動作原理と特性） 第8週 2) 画像の基礎 第9週 3) 検査方法 第10週 4) 画像の実際 骨・関節・軟部組織の損傷 第11週 その他 1) C T ・ M R I 装置・診断の歴史、装置の基礎（構造、動作原理と特性） 第12週 2) 画像の基礎 第13週 3) 検査方法 第14週 4) 画像の実際 骨・関節・軟部組織の損傷 第15週 まとめ				
<b>テキスト</b> 整形外科学：安部光俊 著 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 1. 画像診断マニュアル：梶田 明義 他編 金芳堂 2. 骨・関節の画像診断：大野 藤吾 編 中外医学社 3. ここまでわかる単純X線写真：安河内 浩 他著 診断と治療社 4. 入門 運動器の超音波観察法 日本超音波骨軟組織学会 編				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行い 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				

<b>授業科目</b> 臨床柔道整復学Ⅱ	<b>対象学年</b> 3	<b>学期</b> 前期・後期	<b>講義方法</b> 講義・実習	<b>担当教員</b> 実務経験者（柔道整復師） 奈須 崇倫
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師としてスポーツ現場等、多くの臨床経験を有する。専門学校教員として、臨床現場での基礎となる実技や疾病に関する科目を担当する。				
<b>授業の目標</b> 骨・関節・軟部組織損傷の評価・判定に用いる超音波・X線等・その他の画像診断について、装置の構造、動作原理と特性、検査法など基本的な知識を習得する。 また、各装置で撮影した画像を見ることで外傷・障害の実際について理解する。				
<b>授業の概要</b> 1. 教員が配布する資料をもとに、超音波画像診断装置を中心に各種診断装置の構造、動作原理と特性、検査法など基本的な項目について説明する。 2. 各装置で撮影した画像を見ることで骨・関節・軟部組織損傷に発生する外傷・障害の実際について知識を深める。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス、画像診断の目的・必要性 第2週 超音波装置 1) 手指 母指屈筋腱の描出 第3週 2) 手関節 手根骨、手根管、伸筋腱の区画の描出 第4週 3) 肘関節 前方、後方、内側、外側の描出（骨、肘部管、靭帯） 第5週 4) 肩関節 上腕骨頭、関節窩、関節裂隙の描出 第6週 5) 肩関節 上腕二頭筋、腱板、関節唇の描出 第7週 6) 下腿 脛骨、距腿関節、外果の関節 第8週 7) 下腿 脛腓靭帯、距腓靭帯、踵腓靭帯、腓骨筋腱の描出 第9週 8) 下腿 三角靭帯、足根管、腓腹筋、ヒラメ筋、アキレス腱の描出 第10週 9) 膝関節 膝蓋上囊、大腿四頭筋、膝蓋骨、膝蓋大腿関節の描出 第11週 10) 膝関節 膝蓋腱、十字靭帯、側副靭帯、半月、鵞足の描出 第12週 11) 膝関節 腸脛靭帯、大腿二頭筋、ファベラの描出 第13週 12) 股関節 腸腰筋、直筋、上前腸骨棘、下前腸骨棘の描出 第14週 13) 股関節 ハムストリング、坐骨神経、内転筋の描出 第15週 まとめ				
<b>テキスト</b> 整形外科学：安部光俊 著 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 1. 画像診断マニュアル：梶田 明義 他編 金芳堂 2. 骨・関節の画像診断：大野 藤吾 編 中外医学社 3. ここまでわかる単純X線写真：安河内 浩 他著 診断と治療社 4. 入門 運動器の超音波観察法 日本超音波骨軟組織学会 編				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行い100点満点の60点以上を合格とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 臨床柔道整復学Ⅲ	対象学年 2	学期 前期・(後期)	講義方法 (講義)・実習	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 宮迫 宏治
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として豊富な治療経験を有し、様々な症状の患者と接する。専門学校教員として、人体の動きの基礎となる学問などを担当している。				
<b>授業の目標</b> 頭部・体幹部・上肢に発生する脱臼についての理解をさらに深めるとともに、固定法や治療に向けての指導法を学ぶ。臨床に役立つ実践力を身につける。				
<b>授業の概要</b> 「柔道整復学 理論編」・「柔道整復学 実技編」を用い、脱臼の発生機序・特徴・固定法を学ぶ。柔道整復術の素晴らしさを伝え、今後の学習意欲の向上につなげる。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス・脱臼総論について 第2週 頭部（顎関節）の脱臼の特徴 第3週 顎関節脱臼の整復法・固定法 第4週 体幹部の脱臼とその治療 第5週 鎖骨脱臼の特徴 第6週 鎖骨脱臼の整復法・固定法 第7週 肩関節脱臼の特徴 第8週 肩関節脱臼の整復法・固定法 第9週 肘関節脱臼の特徴 第10週 肘関節脱臼の整復法・固定法 第11週 手関節脱臼の特徴 第12週 手関節脱臼の整復法・固定法 第13週 手指関節脱臼の特徴 第14週 手指関節脱臼の整復法・固定法 第15週 まとめ				
<b>テキスト</b> 柔道整復学 理論編：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂 柔道整復学 実技編：全国柔道整復学校協会 監修				
<b>教材・参考文献</b> 解剖学：全国柔道整復学校協会 監修 岸 清 ・ 石塚 寛 編 医歯薬出版				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。実技の理解度確認のため、必要に応じ実技テストをおこなう。 なお、定期試験は筆記試験を行ない100点満点の60点以上を合格とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 臨床柔道整復学Ⅲ	対象学年 3	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 宮迫 宏治
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として豊富な治療経験を有し、様々な症状の患者と接する。専門学校教員として、人体の動きの基礎となる学問などを担当している。				
<b>授業の目標</b> 骨盤部および下肢に発生する脱臼についての理解をさらに深めるとともに、固定法や治療に向けての指導法を学ぶ。臨床に役立つ実践力を身につける。				
<b>授業の概要</b> 「柔道整復学 理論編」・「柔道整復学 実技編」を用い、脱臼の発生機序・特徴・固定法を学ぶ。柔道整復術の素晴らしさを伝え、今後の学習意欲の向上につなげる。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス・脱臼総論について 第2週 骨盤部・下肢部の筋肉 第3週 股関節・膝関節・足関節の特徴とその運動 第4週 股関節脱臼の特徴 第5週 股関節脱臼の整復法・固定法 第6週 膝関節脱臼の特徴 第7週 膝関節脱臼の整復法・固定法 第8週 足関節脱臼の特徴 第9週 足関節脱臼の整復法・固定法 第10週 足指関節脱臼の特徴 第11週 足指関節脱臼の整復法・固定法 第12週 下肢の脱臼と軟部組織損傷 第13週 下肢の脱臼と観血療法 第14週 下肢の脱臼とリハビリ 第15週 まとめ				
<b>テキスト</b> 柔道整復学 理論編：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂 柔道整復学 実技編：全国柔道整復学校協会 監修				
<b>教材・参考文献</b> 解剖学：全国柔道整復学校協会 監修 岸 清 ・ 石塚 寛 編 医歯薬出版				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。実技の理解度確認のため、必要に応じ実技テストをおこなう。 なお、定期試験は筆記試験を行ない100点満点の60点以上を合格とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

<b>授業科目</b> 臨床柔道整復学Ⅳ	<b>対象学年</b> 3	<b>学期</b> 前期・後期	<b>講義方法</b> 講義・実習	<b>担当教員</b> 実務経験者（柔道整復師） 奈須 崇倫
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師としてスポーツ現場等、多くの臨床経験を有する。専門学校教員として、臨床現場での基礎となる実技や疾病に関する科目を担当する。				
<b>授業の目標</b> 下肢・体幹部に発生する骨折の発生機序、分類、症状、合併症、整復法、固定法、後療法等の基本的な内容について理解する。柔道整復の業務、また国家試験受験に必要な骨折の各論（下肢・体幹）に関する基本的な知識の再確認を行う。				
<b>授業の概要</b> テキストならびにその他の資料を用いて柔道整復の業務を行うために必要な下肢・体幹の骨折に関する骨折の内容を再確認するとともに、国家試験受験の準備を行う。 なお、必要に応じ視聴覚教材を使用する。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス、下肢に発生する骨折の概要 第2週 下肢 下肢帯 骨盤骨単独骨折、骨盤骨環骨折 第3週 大腿骨 1) 近位骨端部骨折 第4週 2) 骨幹部骨折 第5週 3) 遠位骨端部骨折 第6週 膝蓋骨 膝蓋骨骨折 第7週 下腿骨 1) 近位骨端部骨折 第8週 2) 骨幹部骨折 第9週 3) 遠位骨端部骨折 第10週 足根骨 距骨、 第11週 踵骨骨折 第12週 舟状骨、立方骨、楔状骨骨折 第13週 中足骨 中足骨の骨折 第14週 足指骨 足指骨の骨折 第15週 まとめ				
<b>テキスト</b> 柔道整復学（理論編）：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 柔道整復学（実技編）：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂 包帯固定学：全国柔道整復学校協会 監修 阿部 光俊 著 南江堂 整形外科学：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂 標準整形外学：寺山 和雄、辻 陽雄 監修 医学書院				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。なお、定期試験は筆記試験を行い100点満点の60点以上を合格とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 臨床柔道整復学IV	対象学年 3	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 奈須 崇倫
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師としてスポーツ現場等、多くの臨床経験を有する。専門学校教員として、臨床現場での基礎となる実技や疾病に関する科目を担当する。				
<b>授業の目標</b> 下肢・体幹部の骨折の基本的な整復法、固定法、後療法を習得する。				
<b>授業の概要</b> 1. テキストを用いて下肢の骨折の基本的な整復法、固定法、後療法を説明する。 なお、必要に応じ視聴覚機器を使用する。 2. 実習は原則として2人1組で行うが内容により3～4人で行う。				
<b>授業計画</b> 第1週 下肢 大腿骨 1) 頸部骨折 第2週 2) 骨幹部骨折 第3週 3) 膝蓋骨 膝蓋骨骨折 第4週 下腿骨 1) 下腿骨骨幹部骨折 第5週 2) 果部骨折 ①回内外転損傷 ②回外内転損傷 第6週 2) 果部骨折 ③回内・外旋損傷 ④回外・外旋損傷 第7週 足根骨 1) 舟状骨骨折 第8週 足根骨 1) 距骨骨折 第9週 1) 踵骨骨折 ①水平骨折、戴距突起骨折 第10週 中足骨 1) 骨幹部骨折 2) 第5中足骨基底部裂離骨折 3) 足指骨骨折 第11週 下 肢 1) 股関節部の包帯（上行・下行麦穂帯） 第12週 2) 大腿部の包帯（大腿部の包帯、麦穂帯） 第13週 3) 膝関節部の包帯（離開・集合亀甲帯） 第14週 4) 下腿部の包帯（下腿部の包帯、麦穂帯） 第15週 5) 足関節部の包帯				
<b>テキスト</b> 柔道整復学（実技編）：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 柔道整復学（理論編）：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂 標準整形外科学：寺山 和雄、辻 陽雄 監修 医学書院				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の結果で評価する。試験は実技試験を行い100点満点で60点以上を合格とする。 なお、評価に平常評価（出席、態度等）を加味することがある。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				



<b>授業科目</b> 臨床柔道整復学Ⅳ	<b>対象学年</b> 3	<b>学期</b> 前期・後期	<b>講義方法</b> 講義・実習	<b>担当教員</b> 実務経験者（柔道整復師） 奈須 崇倫
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師としてスポーツ現場等、多くの臨床経験を有する。専門学校教員として、臨床現場での基礎となる実技や疾病に関する科目を担当する。				
<b>授業の目標</b> 柔道整復の業務を行うにあたり、患者の状態を評価するための基本的な所見の取り方や日常よくある内科的疾患について習得する。				
<b>授業の概要</b> プリント・スライドを用いて臨床上必要な内科疾患について学ぶ。				
<b>授業計画</b> 第1週 診察の意義・進め方 問診 第2週 視診 打診 触診について 第3週 生命徴候 第4週 知覚検査 第5週 呼吸器疾患 第6週 循環器疾患 第7週 消化器疾患 第8週 肝・胆・膵疾患 第9週 代謝・栄養疾患 第10週 内分泌疾患 甲状腺・副甲状腺疾患 第11週 血液・造血疾患 第12週 腎・尿路疾患 第13週 神経疾患 第14週 リウマチ性疾患・アレルギー性疾患・免疫不全症 第15週 感染症・性病 環境要因による疾患 各検査の基準値				
<b>テキスト</b> 一般臨床医学：全国柔道整学校協会 監修 奈良 信雄,吉沢 靖之,椎名 晋一 著 医歯薬出版社				
<b>教材・参考文献</b> STEP 内科 高橋 茂樹（著） 板垣 英二				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の結果で評価する。 評価は実技試験により行い、60/100点以上を及第（合格）とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 臨床柔道整復学IV	対象学年 3	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 奈須 崇倫
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師としてスポーツ現場等、多くの臨床経験を有する。専門学校教員として、臨床現場での基礎となる実技や疾病に関する科目を担当する。				
<b>授業の目標</b> 柔道整復の業務を行うにあたり、応急処置時に必要な外科的疾患や患者の状態を評価するための基本的な所見の取り方を習得する。				
<b>授業の概要</b> プリント・スライドを用いて臨床上必要な外科疾患について学ぶ。				
<b>授業計画</b> 第1週 総論 第2週 外傷、頭部・ムチ打ち症 胸部・腹部外傷 第3週 感染症、急性および慢性炎症 第4週 腫瘍 ①良性腫瘍 ②悪性腫瘍 第5週 ショックの病理 第6週 輸血および輸液、高カロリー輸液 第7週 滅菌と消毒、 第8週 手術法 麻酔法 第9週 移植と免疫 第10週 心肺蘇生術、 第11週 出血と止血 第12週 脳神経外科疾患 第13週 胸壁・肺・縦隔疾患 乳腺疾患 第14週 心臓疾患 脈管疾患 第15週 代表的腹部外科疾患				
<b>テキスト</b> 一般臨床医学：全国柔道整学校協会 監修 奈良 信雄,吉沢 靖之,椎名 晋一 著 医歯薬出版社 外科学：全国柔道整学校協会 監修 炭山嘉伸 編 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> STEP 内科 高橋 茂樹（著）板垣 英二 STEP 外科〈1〉外科総論・脳神経外科 <a href="#">小林 士郎</a> ・ <a href="#">小田 行一郎</a>				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の結果で評価する。 評価は実技試験により行い、60/100点以上を及第（合格）とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 臨床柔道整復学Ⅴ	対象学年 3	学期 前期 後期	講義方法 講義・実習	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 重石 雄大
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院に勤務し、外傷治療の経験を有する。その後、専門学校教員として上肢骨折の講義や実技を担当している。				
<b>授業の目標</b> 1. 臨床上頻度の高い骨折の理解と固有の症状を学習する。 2. 1. 2年次に習得した知識をさらに機能的、解剖学的に追求する。				
<b>授業の概要</b> 1. テキストを用いて上肢骨折の各部位の骨折の特徴・整復法・固定法などを学習する。 2. 臨床的ないろいろなケースを想定し対処方法を学習する。 3. 写真、資料を用いて多くの症例の評価法と治療法を学習する。				
<b>授業計画</b> 第1週 手根骨骨折（舟状骨骨折） 第2週 手根骨骨折（月状骨骨折、三角骨骨折、有鉤骨骨折） 第3週 中手骨頭部骨折 第4週 中手骨頸部骨折（ボクサー骨折、パンチ骨折） 第5週 中手骨骨幹部骨折 第6週 中手骨基底部骨折 第7週 overlapping finger 第8週 Bennett 骨折 第9週 Roland 骨折 第10週 指骨骨折 第11週 基節骨骨折 第12週 中節骨骨折 第13週 末節骨骨折 第14週 Mallet finger 第15週 総復習				
<b>テキスト</b> 柔道整復学 理論編 南江堂 監修 社) 全国柔道整復学校協会 柔道整復学 実技編 南江堂 監修 社) 全国柔道整復学校協会				
<b>教材・参考文献</b> 標準整形外科学 医学書院 監修 石井清一 平澤泰介 上肢骨折の保存療法 医歯薬出版 著 武田功 竹内義享 大村晋司				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の結果で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行い 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀 (90 点以上)、優 (80 点以上)、良 (70 点以上)、可 (60 点以上)、不可 (60 点未満) とする。				
<b>備考</b>				

<b>授業科目</b>  臨床柔道整復学Ⅴ	<b>対象学年</b>  3	<b>学期</b>  前期・後期	<b>講義方法</b>  講義・実習	<b>担当教員</b> 実務経験者（柔道整復師） 重石 雄大
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院に勤務し、外傷治療の経験を有する。その後、専門学校教員として上肢骨折の講義や実技を担当している。				
<b>授業の目標</b> 1. 臨床上頻度の高い骨折の理解と固有の症状を学習する。 2. 1. 2年次に習得した知識をさらに機能的、解剖学的に追求する。				
<b>授業の概要</b> 1. テキストを用いて臨床上重要な骨折の特徴・整復法・固定法などを学習する。 2. 解剖学的知識をベースに考察し最善の治療方法を追求してゆく。 3. 写真、資料を用いて多くの症例の評価法と治療法を学習する。				
<b>授業計画</b> 第1週 鎖骨骨折（定型骨折） 第2週 上腕骨外科頸外転型骨折 第3週 上腕骨近位端部骨折（hanging cast 法） 第4週 上腕骨骨幹部螺旋状骨折 第5週 上腕骨顆上伸展型骨折 第6週 上腕骨外顆回転骨折 第7週 上腕骨内側上顆骨折（肘関節脱臼との合併） 第8週 Monteggia 伸展型骨折 第9週 前腕骨遠位端部骨折（Colles 骨折） 第10週 前腕骨遠位端部骨折（Smith 骨折） 第11週 Bennett 骨折 第12週 中節骨骨骨折（浅指屈筋腱付着部による転位と固定） 第13週 舟状骨骨折 第14週 Mallet finger 第15週 総復習				
<b>テキスト</b> 柔道整復学 理論編 南江堂 監修 社）全国柔道整復学校協会 柔道整復学 実技編 南江堂 監修 社）全国柔道整復学校協会				
<b>教材・参考文献</b> 標準整形外科学 医学書院 監修 石井清一 平澤泰介 上肢骨折の保存療法 医歯薬出版 著 武田功 竹内義享 大村晋司				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の結果で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行い100点満点の60点以上を合格とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

<p>授業科目 臨床整復学V</p>	<p>対象学年 3</p>	<p>学期 前期・後期</p>	<p>講義方法 講義・実習</p>	<p>担当教員 実務経験者（柔道整復師） 中尾 幸雄</p>
<p><b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整形外科や整骨院での実務経験を有する。専門学校教員として人体の構造や機能等、柔道整復学を学ぶに当たっての基礎となる科目を担当している。</p>				
<p><b>授業の目標</b> 外傷の基礎知識の理解を深め、臨床に向けてのベースを確実にする。</p>				
<p><b>授業の概要</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「柔道整復学・実技編」をテキストとして使用する。また必要に応じプリント、OHP、スライドを配布または使用する。</li> <li>2. 一般的な骨折の分類・症状・合併症・治癒過程・予後などを説明する。</li> <li>3. 理解を確認するため項目ごとに小テストを行う。</li> </ol>				
<p><b>授業計画</b></p> <p>第1週 ガイダンス</p> <p>第2週 柔道整復術 業務、骨折・脱臼・軟部組織損傷の施術</p> <p>第3週 損傷の診察 観察および問診、触診、機能的診察、鑑別疾患</p> <p>第4週 合併症の有無を判定する、その他治療法に関する情報の提示</p> <p>第5週 説明と同意 状況説明、予後の説明、応急処置の説明</p> <p>第6週 徒手整復</p> <p>第7週 固定法</p> <p>第8週 整復・整復後の確認、整復状態の確認、医科との連携、固定期間の検討</p> <p>第9週 後療法 固定、経過、物理療法、手技療法、運動療法</p> <p>第10週 治癒の判定 骨強度</p> <p>第11週 治癒の判定 関節可動域の判定</p> <p>第12週 治癒の判定 筋力の回復</p> <p>第13週 治癒の判定 持久力の回復</p> <p>第14週 運動協調性の回復</p> <p>第15週 まとめ</p>				
<p><b>テキスト・教材・参考文献</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 柔道整復理論 南江堂 監修 社）全国柔道整復学校協会</li> <li>2. 標準整形外科学 医学書院 監修 石井清一 平澤泰介</li> </ol>				
<p><b>成績評価の方法</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 中間・期末に筆記試験を実施する。</li> <li>2. 授業出席日数の2/3以上の出席者を評価の対象とする。</li> </ol> <p>秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。</p>				
<p><b>備考</b></p>				

<b>授業科目</b>  臨床整復学V	<b>対象学年</b>  3	<b>学期</b>  前期・後期	<b>講義方法</b>  講義・実習	<b>担当教員</b> 実務経験者（柔道整復師） 中尾 幸雄
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整形外科や整骨院での実務経験を有する。専門学校教員として人体の構造や機能等、柔道整復学を学ぶに当たっての基礎となる科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 外傷の基礎知識の理解を深め、臨床に向けてのベースを確実にする。				
<b>授業の概要</b> 柔道整復理論を学ぶ際の、解剖学や生理学の知識や人体に加わる力や損傷などについて学び、臨床との繋がりを示していきその知識をこれから学ぶ各論や実際の臨床に活かせる様な思考法を身に付けさせる。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス 第2週 肩部の痛みを訴える患者を診察するときの考え方 外側、前方、前外側 第3週 肩部の痛みを訴える患者を診察するときの考え方 後外方、肩峰部、肩甲骨部 第4週 肩部に間接的な外力が加わった場合 外転位で手掌を衝いて生じた損傷の場合 第5週 肩部に間接的な外力が加わった場合 内転位で肘部を衝いて生じた損傷の場合 第6週 肩部に間接的な外力が加わった場合 外転位で肘部を衝いて生じた損傷の場合 第7週 明確な原因がない場合 野球、バレーボール、テニス 第8週 明確な原因がない場合 水泳、体操競技、重量物 第9週 整形外科における診断の実状 骨折の診断 第10週 整形外科における診断の実状 脱臼の診断 第11週 整形外科における診断の実状 肩腱板損傷の診断 第12週 整形外科における診断の実状 骨端成長軟骨板の損傷の診断 第13週 整形外科における診断の実状 筋損傷の診断 第14週 まとめ 第15週 期末テスト				
<b>テキスト</b> 柔道整復学（理論編）全国柔道整復学校協会 監修 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 解剖学講義 伊藤 隆 著 南山堂、標準整形外科学 石井清一 平澤泰介 監修 医学書院				
<b>成績評価の方法</b> 中間期末テスト及び小テスト 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 臨床柔道整復学VI	対象学年 3	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 山川 和毅
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院での実務経験を有し、幅広い症状の治療を行う。専門学校教員として柔道整復学の基礎科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 運動器（骨・筋肉・関節）についての認識を深めるとともに、各器官つながりや神経との関係を理解する。重要用語をしっかりと理解し、国家試験に対する実践力を身につける。				
<b>授業の概要</b> 「運動学」を使用し、運動学の基礎や重要な項目を理解する。必要に応じプリントや関節模型を使用し、より深い知識の習得を目指す。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス・運動学とは 第2週 運動の表示方法（基本姿勢・面と軸・関節運動） 第3週 身体運動と力学（てこ・運動法則・力学的エネルギー） 第4週 運動器の構造と機能 第5週 神経の構造と機能 第6週 運動と感覚 第7週 反射と随意運動 第8週 姿勢と重心 第9週 歩行・・・歩行周期・歩行分析 第10週 歩行・・・歩行時の筋活動・歩行時のエネルギー代謝 第11週 歩行・・・異常歩行 第12週 運動発達 第13週 運動学習 第14週 関節可動域と測定法 第15週 まとめ				
<b>テキスト</b> 運動学：全国柔道整復学校協会 監修 斎藤 宏 編 医歯薬出版				
<b>教材・参考文献</b> 解剖学：全国柔道整復学校協会 監修 岸 清 ・ 石塚 寛 編 医歯薬出版				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない100点満点の60点以上を合格とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 臨床柔道整復学VI	対象学年 3	学期 前期・(後期)	講義方法 (講義)・実習	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 山川 和毅
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院での実務経験を有し、幅広い症状の治療を行う。専門学校教員として柔道整復学の基礎科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 臨床現場に関わるうえで重要な関節運動に対する理解を深め、臨床に役立つ実践力を身につける。関節の動きだけではなく、関節の構成もしっかりと認識する。				
<b>授業の概要</b> 「運動学」を使用し、関節運動や構成、特徴をしっかり理解する。必要に応じプリントや関節模型を使用し、より深い知識の習得を目指す。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス・関節運動の種類 第2週 上肢帯の構成と運動（鎖骨・肩甲骨） 第3週 肩関節の構成と運動 第4週 肘関節の構成と運動 第5週 手関節・手指関節の構成と運動 第6週 股関節の構成と運動 第7週 膝関節の構成と運動 第8週 足関節・足指関節の構成と運動 第9週 体幹と脊柱の構成と運動 第10週 頰椎の運動 第11週 胸椎と胸郭の運動 第12週 腰椎と仙骨の運動 第13週 骨盤の構成と運動 第14週 顔面・頭部の運動 第15週 まとめ				
<b>テキスト</b> 運動学：全国柔道整復学校協会 監修 斎藤 宏 編 医歯薬出版				
<b>教材・参考文献</b> 解剖学：全国柔道整復学校協会 監修 岸 清 ・ 石塚 寛 編 医歯薬出版				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない100点満点の60点以上を合格とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				



<p>授業科目 臨床柔道整復学VI</p>	<p>対象学年 3</p>	<p>学期 前期・後期</p>	<p>講義方法 講義・実習</p>	<p>担当教員 実務経験者（柔道整復師） 宮迫 宏治</p>
<p><b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として豊富な治療経験を有し、様々な症状の患者と接する。専門学校教員として、人体の動きの基礎となる学問などを担当している。</p>				
<p><b>授業の目標</b> 柔道整復師として臨床現場に出るための基礎知識の認識を深めるとともに、臨床で役立つリハビリテーション学を学ぶ。</p>				
<p><b>授業の概要</b> 「柔道整復学 理論編」・「リハビリテーション医学」を用い、柔道整復師として必要な知識を身につける。必要に応じてプリントを配布し、実技の練習もおこなう。</p>				
<p><b>授業計画</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>第1週 ガイダンス・リハビリテーションとは</li> <li>第2週 リハビリテーション医学・・・障害のレベルとアプローチ</li> <li>第3週 リハビリテーション医学・・・障害の受容と対象疾患</li> <li>第4週 リハビリテーション医学の基礎・・・運動と機能解剖</li> <li>第5週 リハビリテーション医学の基礎・・・姿勢と歩行</li> <li>第6週 リハビリテーション医学の基礎・・・障害学(拘縮・萎縮・神経麻痺)</li> <li>第7週 リハビリテーション医学の基礎・・・治療学(拘縮予防と可動域訓練)</li> <li>第8週 リハビリテーション医学の基礎・・・治療学(筋力増強訓練・麻痺筋の再教育)</li> <li>第9週 評価と診断・・・患者の捉え方</li> <li>第10週 評価と診断・・・身体計測</li> <li>第11週 評価と診断・・・小児の運動発達</li> <li>第12週 評価と診断・・・失認と失行</li> <li>第13週 日常生活動作の評価</li> <li>第14週 心理評価</li> <li>第15週 まとめ</li> </ul>				
<p><b>テキスト</b> リハビリテーション医学：全国柔道整復学校協会 監修 三上 真弘 編 南江堂 柔道整復学 理論編：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂</p>				
<p><b>教材・参考文献</b> 解剖学：全国柔道整復学校協会 監修 岸 清 ・ 石塚 寛 編 医歯薬出版</p>				
<p><b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない100点満点の60点以上を合格とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。</p>				
<p><b>備考</b></p>				

授業科目 臨床柔道整復学VI	対象学年 3	学期 前期・(後期)	講義方法 (講義)・実習	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 宮迫 宏治
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として豊富な治療経験を有し、様々な症状の患者と接する。専門学校教員として、人体の動きの基礎となる学問などを担当している。				
<b>授業の目標</b> 柔道整復師として臨床現場に出るために必要なリハビリテーション医学について学ぶ。より具体的な疾患に対する治療法およびリハビリテーションについて理解を深める。				
<b>授業の概要</b> 「柔道整復学 理論編」・「リハビリテーション医学」を用い、柔道整復師として必要な知識を身につける。必要に応じてプリントを配布し、実技の練習もおこなう。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス・リハビリテーションの治療法とは 第2週 理学療法と作業療法 第3週 補装具について 第4週 言語治療について 第5週 リハビリテーション医学と関連職種 第6週 脳卒中の特徴とリハビリテーション 第7週 脊髄損傷の特徴 第8週 脊髄損傷のリハビリテーション 第9週 小児疾患の特徴とリハビリテーション 第10週 切断の適応とリハビリテーション 第11週 末梢神経損傷とリハビリテーション 第12週 関節リウマチの特徴とリハビリテーション 第13週 整形外科疾患とリハビリテーション 第14週 高齢者のリハビリテーション 第15週 リハビリテーションと福祉法				
<b>テキスト</b> リハビリテーション医学：全国柔道整復学校協会 監修 三上 真弘 編 南江堂 柔道整復学 理論編：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 解剖学：全国柔道整復学校協会 監修 岸 清 ・ 石塚 寛 編 医歯薬出版				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない100点満点の60点以上を合格とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 柔道整復実技 I	対象学年 1	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 山川 和毅
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院での実務経験を有し、幅広い症状の治療を行う。専門学校教員として柔道整復学の基礎科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 柔道整復術をより深く学ぶために基礎となる運動器の機能解剖や関節運動の様式を学ぶ。また、固定や運動療法などに必要な体表解剖について理解を深める。				
<b>授業の概要</b> 「柔道整復学 理論編」・「解剖学」を用い、運動器の基礎的知識、体表解剖の基礎知識を学ぶ。必要に応じてプリントを配布し、より詳しい知識の習得に努める。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス・運動器について 第2週 全身の骨格について 第3週 体幹部の骨格 第4週 上肢の骨格 第5週 下肢の骨格 第6週 頭部の骨格 第7週 骨格筋総論 第8週 頸部・胸部の筋 第9週 腹部・背部の筋 第10週 上肢の筋 第11週 下肢の筋 第12週 体幹部の関節 第13週 上肢の関節 第14週 下肢の関節 第15週 体表解剖				
<b>テキスト</b> 解剖学：全国柔道整復学校協会 監修 岸 清 ・ 石塚 寛 編 医歯薬出版				
<b>教材・参考文献</b> 柔道整復学 理論編：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない100点満点の60点以上を合格とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 柔道整復実技 I	対象学年 1	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 山川 和毅
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院での実務経験を有し、幅広い症状の治療を行う。専門学校教員として柔道整復学の基礎科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 柔道整復師として必要となる触診力を身につける。触診の指標となる骨・筋肉の位置を明確に理解し、臨床現場で役立つ力を養う。				
<b>授業の概要</b> 2人1組になってテーマごとに触診をおこなう。骨・筋肉・関節の位置をしっかりと覚え、その部位で発生する外傷や受傷後の変化などを意識しながら触診力を身につける。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス・触診の基礎 第2週 肩関節・上腕部の触診・・・鎖骨・肩峰・肩鎖関節・胸鎖関節・肩峰と上腕骨の間隙 第3週 肩関節・上腕部の触診・・・大結節・小結節・結節間溝・烏口突起・肩甲骨 第4週 肘関節・前腕部の触診・・・上腕骨各部 第5週 肘関節・前腕部の触診・・・ヒューター線・肘頭・橈骨頭 第6週 手関節部の触診・・・橈骨茎状突起・スナフボックス・第1手根中手関節 第7週 手関節部の触診・・・大菱形骨・尺骨茎状突起・三角骨・リスター結節 第8週 手関節部の触診・・・有頭骨・月状骨・舟状骨結節 第9週 手関節部の触診・・・豆状骨・有鈎骨・中手骨・指骨 第10週 肩関節前方脱臼の外観・SLAP損傷 第11週 ルーズショルダーの確認方法・tear drop sign 第12週 下垂指変形・急性塑性変形 第13週 腱板疎部・後方四角腔 第14週 三角線維軟骨複合体損傷・手根管症候群 第15週 まとめ				
<b>テキスト</b> 柔道整復学 理論編：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> カラー写真で学ぶ 四肢関節の触診法 医歯薬出版				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。実技の理解度確認のため、必要に応じ実技テストをおこなう。 なお、定期試験は100点満点の60点以上を合格とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 柔道整復実技 I	対象学年 1	学期 前期・(後期)	講義方法 講義・(実習)	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 山川 和毅
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院での実務経験を有し、幅広い症状の治療を行う。専門学校教員として柔道整復学の基礎科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 柔道整復師として接することも多い高齢者の解剖学的特徴・機能的特徴を学ぶ。高齢者の身体の特徴を理解したうえで、発生頻度の高い外傷とその治療法を認識し、受傷しないための身体づくりを学ぶ。				
<b>授業の概要</b> 「柔道整復学 理論編」・「解剖学」を用い、高齢者の身体の特徴や発生頻度の高い外傷を学ぶ。外傷予防につながる体操やトレーニングを紹介し、実践力を身につける。				
<b>授業計画</b> 第 1 週 ガイダンス・高齢者の身体的特徴について 第 2 週 高齢者の骨の特徴と骨粗鬆症 第 3 週 高齢者の筋肉の特徴と筋力低下 第 4 週 高齢者の関節の特徴と関節拘縮 第 5 週 高齢者に発生しやすい外傷・治療上の注意点 第 6 週 椎骨の圧迫骨折と治療法 第 7 週 上腕骨外科頸骨折と治療法 第 8 週 腱板断裂と治療法 第 9 週 コーレス骨折と治療法 第 10 週 大腿骨頸部骨折と治療法 第 11 週 変形性膝関節症と治療法 第 12 週 高齢者のスポーツ外傷と予防 第 13 週 高齢者のリハビリテーション 第 14 週 高齢者の機能訓練（体操・トレーニング） 第 15 週 まとめ				
<b>テキスト</b> 柔道整復学 理論編：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂 柔道整復学 実技編；全国柔道整復学校協会 監修 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 解剖学：全国柔道整復学校協会 監修 岸 清 ・ 石塚 寛 編 医歯薬出版				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				

授業科目 柔道整復実技 I	対象学年 1	学期 前期・(後期)	講義方法 講義・(実習)	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 山川 和毅
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院での実務経験を有し、幅広い症状の治療を行う。専門学校教員として柔道整復学の基礎科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 柔道整復師として必要となる触診力を身につける。触診の指標となる骨・筋肉の位置を明確に理解し、臨床現場で役立つ力を養う。				
<b>授業の概要</b> 2 人 1 組になってテーマごとに触診をおこなう。骨・筋肉・関節の位置をしっかりと覚え、その部位で発生する外傷や受傷後の変化などを意識しながら触診力を身につける。				
<b>授業計画</b> 第 1 週 触診時の配慮と技術 第 2 週 股関節部の触診 …… 腸骨稜・上前腸骨棘・下前腸骨棘 第 3 週 股関節部の触診 …… 大腿骨頭・大転子・坐骨結節 第 4 週 大腿三角・ローゼルネラトン線 第 5 週 膝関節部の触診 …… 膝蓋骨・膝蓋靭帯・膝蓋内側滑膜ヒダ 第 6 週 膝関節部の触診 …… 脛骨粗面・関節裂隙・鵞足部 第 7 週 膝関節部の触診 …… 脛骨内側縁・外側側副靭帯・内側側副靭帯 第 8 週 膝関節部の触診 …… 腸脛靭帯・腓骨頭・下腿三頭筋 第 9 週 Q 角・関節包と膝蓋下脂肪体・サギング徴候 第 10 週 足関節部の触診 …… 外果・第 5 中足骨粗面・前距腓靭帯 第 11 週 足関節部の触診 …… 足根洞・長短腓骨筋腱・踵骨前方突起 第 12 週 足関節部の触診 …… 内果・舟状骨結節・足背動脈 第 13 週 足関節部の触診 …… 中足骨・アキレス腱・足底腱膜 第 14 週 アキレス腱断裂・足底腱膜炎 第 15 週 まとめ				
<b>テキスト</b> 柔道整復学 理論編：全国柔道整復学校協会 監修 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> カラー写真で学ぶ 四肢関節の触診法 医歯薬出版				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。実技の理解度確認のため、必要に応じ実技テストをおこなう。 なお、定期試験は 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b>				

<b>授業科目</b>  柔道整復実技Ⅱ	<b>対象学年</b>  1	<b>学期</b>  前期・後期	<b>講義方法</b>  講義・実習	<b>担当教員</b> 実務経験者（柔道整復師） 奈須 崇倫
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師としてスポーツ現場等、多くの臨床経験を有する。専門学校教員として、臨床現場での基礎となる実技や疾病に関する科目を担当する。				
<b>授業の目標</b> 1. 巻軸包帯を用いて基本的な包帯法・材料・用具を目的に応じ選択できるようになる。 2. 材料・用具を安全に使用できるようになる。				
<b>授業の概要</b> 1. 基本的な包帯法（被覆包帯）ならびに特殊包帯（固定包帯）について教員が説明・示範し、学生はそれを模倣し習得する。 2. プリント、OHP、スライド等を必要に応じ配布または使用する。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス、上手な巻軸帯の巻き方と注意事項 第2週 被覆包帯 巻軸帯の巻き戻し、基本包帯法 第3週 手指部の包帯 第4週 包か帯 第5週 手関節部の包帯 手（手関節）上行麦穂帯 下行麦穂帯 第6週 上腕部の包帯 第7週 前腕部の包帯 前腕部の包帯 第8週 前腕の麦穂帯 第9週 肘部の包帯 肘（肘関節）離開亀甲帯 肘（肘関節）集合亀甲帯 第10週 肩部の包帯 上行 下行麦穂帯 第11週 特殊包帯（固定包帯） デゾー包帯① I・II帯 第12週 デゾー包帯② III・IV帯 第13週 足指部の包帯 鍔帯 第14週 総趾包か帯 第15週 足関節部の包帯 足（足関節）上行麦穂帯 下行麦穂帯				
<b>テキスト</b> 包帯固定学：社団法人 全国柔道整復学校協会・教科書委員会 編集 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 1. 柔道整復学（実技編）：社団法人 全国柔道整復学校協会・教科書委員会 編集 南江堂 2. 柔道整復学（理論編）：社団法人 全国柔道整復学校協会・教科書委員会 編集 南江堂				
<b>成績評価の方法</b> 平常評価（出席、態度）、定期試験の結果で評価する（平常評価 20%、定期試験 80%）。 評価は総合評価により行い、60/100 点以上を及第（合格）とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b> 1. 短パン、T シャツ（特殊包帯時のみ）を毎時間持参する。 2. 配布したプリント、参考文献 1・2 を毎時間持参する				

<b>授業科目</b>  柔道整復実技Ⅱ	<b>対象学年</b>  1	<b>学期</b>  前期・ <b>後期</b>	<b>講義方法</b>  講義・ <b>実習</b>	<b>担当教員</b> 実務経験者（柔道整復師） 奈須 崇倫
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師としてスポーツ現場等、多くの臨床経験を有する。専門学校教員として、臨床現場での基礎となる実技や疾病に関する科目を担当する。				
<b>授業の目標</b> 1. 巻軸包帯を用いて基本的な包帯法・材料・用具を目的に応じ選択できるようになる。 2. 材料・用具を安全に使用できるようになる。 3. 基本的な四肢および体幹の固定ができるようになる。				
<b>授業の概要</b> 1. 基本的な包帯法（被覆包帯）ならびに特殊包帯（固定包帯）について教員が説明・示範し、学生はそれを模倣し習得する。 2. プリント、OHP、スライド等を必要に応じ配布または使用する				
<b>授業計画</b> 第1週 踵の包帯（亀甲帯・三節帯） 第2週 下腿部の包帯 下腿部の包帯 第3週 下腿の麦穂帯 第4週 膝部の包帯 膝（膝関節） 離開亀甲帯 第5週 膝（膝関節） 集合亀甲帯 第6週 大腿部・股関節部の包帯 第7週 絆創膏固定・テーピング（絆創膏）：胸郭部の固定 p132～142 第8週 絆創膏固定・テーピング（非伸縮性テープ）：下腿部の固定 第9週 絆創膏固定・テーピング（非伸縮性テープ）：足関節の固定 第10週 絆創膏固定・テーピング（伸縮性テープ）：膝関節の固定 第11週 硬性材料 クラメール副子：上肢の固定 第12週 クラメール副子：下肢の固定 第13週 吸水硬化性キャスト材①（ギプス）：手関節の固定 第14週 熱可塑性キャスト材①（プライトン）：母指の固定 第15週 熱可塑性キャスト材②（ソフトキャスト）：足関節の固定				
<b>テキスト</b> 包帯固定学：社団法人 全国柔道整復学校協会・教科書委員会 編集 南江堂 『標準理学療法学 物理療法学』：奈良 勲 監修 医学書院				
<b>教材・参考文献</b> 1. 柔道整復学（実技編）：社団法人 全国柔道整復学校協会・教科書委員会 編集 南江堂 2. 柔道整復学（理論編）：社団法人 全国柔道整復学校協会・教科書委員会 編集 南江堂				
<b>成績評価の方法</b> 平常評価（出席、態度）、定期試験の結果で評価する（平常評価 20%、定期試験 80%）。 評価は総合評価により行い、60/100 点以上を及第（合格）とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b> 1. 短パン、Tシャツ（特殊包帯時のみ）を毎時間持参する。 2. 配布したプリント、参考文献 1・2 を毎時間持参する				



授業科目 柔道整復実技Ⅱ	対象学年 2	学期 前期・後期	講義方法 講義・実習	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 奈須 崇倫
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師としてスポーツ現場等、多くの臨床経験を有する。専門学校教員として、臨床現場での基礎となる実技や疾病に関する科目を担当する。				
<b>授業の目標</b> 1 年次に学んだ包帯法の基本的な知識・技術の上に、臨床を想定した実習を行い柔道整復の業務における包帯の実際を習得する。				
<b>授業の概要</b> 1. テキスト・資料をもとに教員が臨床において発生する上肢・下肢・体幹の運動器損傷に対する包帯法について示範し、学生はそれを模倣しその技術を習得する。				
<b>授業計画</b> 第 1 週 被覆包帯 上 肢 1) 肩関節部の包帯（上行・下行麦穂帯） 第 2 週 2) 上腕部の包帯（上腕部の包帯、麦穂帯） 第 3 週 3) 肘関節部の包帯（離開・集合亀甲帯）、前腕部の包帯 第 4 週 4) 手関節部の包帯（上行・下行麦穂帯） 第 5 週 5) 指部の包帯 ① 隻指帯、全指帯 第 6 週 6) 指部の包帯 ② 指頭包か帯、母指の麦穂帯 第 7 週 下 肢 1) 股関節部の包帯（上行・下行麦穂帯） 第 8 週 2) 大腿部の包帯（大腿部の包帯、麦穂帯） 第 9 週 3) 膝関節部の包帯（離開・集合亀甲帯） 第 10 週 4) 下腿部の包帯（下腿部の包帯、麦穂帯） 第 11 週 5) 足関節部の包帯 ①（麦穂帯） 第 12 週 固定包帯 上 肢 1) デゾー氏の包帯 第 13 週 2) 提肘三角巾 第 14 週 胸背部 3) 胸・背・胸背十字帯 第 15 週 まとめ				
<b>テキスト</b> 包帯固定学：社団法人 全国柔道整復学校協会・教科書委員会 編集 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 1. 柔道整復学（実技編）：社団法人 全国柔道整復学校協会・教科書委員会 編集 南江堂 2. 柔道整復学（理論編）：社団法人 全国柔道整復学校協会・教科書委員会 編集 南江堂				
<b>成績評価の方法</b> 平常評価（出席、態度）、定期試験の結果で評価する（平常評価 20%、定期試験 80%）。 評価は総合評価により行い、60/100 点以上を及第（合格）とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b> 1. 短パン、T シャツを毎時間持参する。 2. 配布したプリント、参考文献 1・2 を毎時間持参する				

授業科目 柔道整復実技Ⅱ	対象学年 2	学期 前期・ <u>後期</u>	講義方法 講義・ <u>実習</u>	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 奈須 崇倫
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師としてスポーツ現場等、多くの臨床経験を有する。専門学校教員として、臨床現場での基礎となる実技や疾病に関する科目を担当する。				
<b>授業の目標</b> 柔道整復師への社会的要請の一つである競技者の外傷予防に対し、新たに追加する競技者の生理学的特徴・変化で得た知識を活用し、競技者に対する具体的な外傷予防の手法を身に付けるために行う。				
<b>授業の概要</b> 1. 競技者が怪我をしない身体づくり、トレーニング法、テーピング等を学び実践する。 2. プリント、OHP、スライド等を必要に応じ配布または使用する。				
<b>授業計画</b> 第1週            ガイダンス 総論（スポーツ外傷とは） 第2週            外科的スポーツ外傷、障害の基礎知識（頸部・肩部） 第3週            外科的スポーツ外傷、障害の基礎知識（上肢） 第4週            外科的スポーツ外傷、障害の基礎知識（下肢） 第5週            外科的スポーツ外傷、障害の基礎知識（体幹） 第6週            スポーツ現場での具体的対応 第7週            怪我をしない身体づくり（トレーニング・ストレッチ法）（概説） 第8週            怪我をしない身体づくり（トレーニング・ストレッチ法）（頸部） 第9週            怪我をしない身体づくり（トレーニング・ストレッチ法）（肩部） 第10週           怪我をしない身体づくり（トレーニング・ストレッチ法）（上肢） 第11週           怪我をしない身体づくり（トレーニング・ストレッチ法）（下肢） 第12週           怪我をしない身体づくり（トレーニング・ストレッチ法）（体幹） 第13週           テーピング法（肩関節） 第14週           テーピング法（膝関節）                      第15週            テーピング法（足関節）				
<b>テキスト</b> 1. 包帯固定学：社団法人 全国柔道整復学校協会・教科書委員会 編集 南江堂 2. 柔道整復学（実技編）：社団法人 全国柔道整復学校協会・教科書委員会 編集 南江堂				
<b>教材・参考文献</b>				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は実技試験を行ない100点満点の60点以上を合格とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b> 1. 常に臨床の現場に立っていることを頭において真摯な態度で実技を行うこと。また、授業中は必ず白衣（またはケーシー）を着用し、学生証を提示すること 2. 実技の内容により脱衣が必要になるので、脱衣可能な衣服を用意すること				

<b>授業科目</b> 柔道整復実技Ⅲ	<b>対象学年</b> 2	<b>学期</b> 前期・後期	<b>講義方法</b> 講義・実習	<b>担当教員</b> 実務経験者（柔道整復師） 山川 和毅
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院での実務経験を有し、幅広い症状の治療を行う。専門学校教員として柔道整復学の基礎科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 治療法の基礎知識の理解を深め、各論に向けてのベース確実にする。				
<b>授業の概要</b> 1. 「柔道整復理論」をテキストとして使用する。また必要に応じプリント、OHP、スライドを配布または使用する。 2. 一般的な外傷の分類・症状・合併症・治療過程・予後などを説明する。 3. 理解を確認するため項目ごとに小テストを行う。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス 第2週 評価 1) 注意点 2) 手順 3) 問診の進め方 4) 患者の体位 5) 身体評価の流れ 6) 初期評価、中間評価、最終評価 第3週 施術録の扱いと記載 第4週 整復法（骨折） 1) 非観血的整復の要点 2) 一般原則 3) 分類（牽引直圧、屈曲） 4) 牽引整復法 第5週 整復法（脱臼） 1) 非観血的整復の要点 2) 一般原則 3) 分類（槓杆、牽引） 第6週 軟部組織損傷の初期処置 1) 捻挫 2) 筋損傷 3) 腱損傷 4) 神経損傷 5) 血管 6) 皮膚 第7週 固定法 1) 目的 2) 種類 3) 肢位 4) 期間 5) 範囲 6) 材料 7) 装具 第8週 固定法 1) 厚紙副子、すだれ副子 第9週 固定法 2) 金属副子 第10週 固定法 3) アルミ副子 第11週 固定法 4) ギプスとキャスト材 有褥ギプス 第12週 固定法 4) ギプスとキャスト材 無褥ギプス 第13週 固定法 4) ギプスとキャスト材 歩行ギプス 第14週 固定法 4) ギプスとキャスト材 ギプスシーネ 第15週 まとめ				
<b>テキスト・教材・参考文献</b> 1. 柔道整復理論 南江堂 監修 社）全国柔道整復学校協会 2. 標準整形外科学 医学書院 監修 石井清一 平澤泰介				
<b>成績評価の方法</b> 1. 中間・期末に筆記試験を実施する。 2. 授業出席日数の2/3以上の出席者を評価の対象とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

<b>授業科目</b> 柔道整復実技Ⅲ	<b>対象学年</b> 2	<b>学期</b> 前期・後期	<b>講義方法</b> 講義・実習	<b>担当教員</b> 実務経験者（柔道整復師） 山川 和毅
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院での実務経験を有し、幅広い症状の治療を行う。専門学校教員として柔道整復学の基礎科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 治療法の基礎知識の理解を深め、各論に向けてのベース確実にする。				
<b>授業の概要</b> 1. 「柔道整復理論」をテキストとして使用する。また必要に応じプリント、OHP、スライドを配布または使用する。 2. 一般的な外傷の分類、症状、合併症・治療過程、予後などを説明する。 3. 理解を確認するため項目ごとに小テストを行う。				
<b>授業計画</b> 第1週 後療法 手技療法 1) 軽摩法 2) 強擦法 3) 揉捏法 第2週 後療法 手技療法 4) 叩打法 5) 振戦法 6) 圧迫法 7) 伸長法 第3週 後療法 手技療法 応用 1) 局所的な応用 2) 遠隔部への応用 3) 禁忌 第4週 後療法 運動療法 運動の基本型 1) 他動運動 2) 自動運動 第5週 後療法 運動療法 運動の基本型 1) 等尺性収縮 2) 等張性収縮 3) 遠心性収縮 4) 求心性収縮 第6週 後療法 運動療法 全身運動療法 第7週 後療法 運動療法 実際 第8週 中間テスト 第9週 物理療法 1) 分類 2) 安全対策 3) 適応と禁忌 第10週 物理療法 1) 電気療法 第11週 物理療法 2) 温熱療法 3) 寒冷療法 第12週 物理療法 4) 光線療法 第13週 物理療法 5) 脊椎牽引療法 6) 間欠的圧迫法 第14週 指導管理 第15週 期末テスト				
<b>テキスト</b> 柔道整復学（理論編）全国柔道整復学校協会 監修 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 解剖学講義 伊藤 隆 著 南山堂、標準整形外科学 石井清一 平澤泰介 監修 医学書院				
<b>成績評価の方法</b> 中間期末テスト及び小テスト 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

<p>授業科目 柔道整復実技Ⅲ</p>	<p>対象学年 2</p>	<p>学期 前期・後期</p>	<p>講義方法 講義・実習</p>	<p>担当教員 実務経験者（柔道整復師） 重石 雄大</p>
<p><b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院に勤務し、外傷治療の経験を有する。その後、専門学校教員として上肢骨折の講義や実技を担当している。</p>				
<p><b>授業の目標</b> 柔道整復の技術の素晴らしさ、難しさを知り、認定実技審査の項目を重点的に指導する。 実習に必要な基礎的な知識の習得。</p>				
<p><b>授業の概要</b> 1. 「柔道整復学 実技編」をテキストとして使用する。また必要に応じプリント、スライドを配布または使用する。 2. 各部位の骨折の特徴・整復法・固定法などを学習する。 3. 理解を確認するため項目ごとに小テストと実技を行う。</p>				
<p><b>授業計画</b></p> <p>第1週 鎖骨骨折（診察）          第2週 鎖骨骨折（整復法）          第3週 鎖骨骨折（固定法）          第4週 上腕骨外科頸骨折（診察）          第5週 上腕骨外科頸骨折（整復法）          第6週 上腕骨外科頸骨折（固定）          第7週 上腕骨顆上骨折（診察）          第8週 上腕骨顆上骨折（整復法）          第9週 上腕骨顆上骨折（固定）          第10週 コーレス骨折（診察）          第11週 コーレス骨折（整復法）          第12週 コーレス骨折（固定）          第13週 実習前の指導（評価法、諸注意）          第14週 施術録（カルテ）の記載方法・取扱いなど      第15週 前期末試験</p>				
<p><b>テキスト</b> 柔道整復学 実技編 南江堂 監修 社）全国柔道整復学校協会</p>				
<p><b>教材・参考文献</b> 1. 標準整形外科学 医学書院 監修 石井清一 平澤泰介 2. 上肢骨折の保存療法 医歯薬出版 著 武田功 竹内義享 大村晋司</p>				
<p><b>成績評価の方法</b> 1. 中間・期末に実技試験を実施する。 2. 授業出席日数の2／3以上の出席者を評価の対象とする。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。</p>				
<p><b>備考</b></p>				

授業科目 柔道整復実技Ⅲ	対象学年 2	学期 前期・ <u>後期</u>	講義方法 <u>講義</u> ・実習	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 重石 雄大
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院に勤務し、外傷治療の経験を有する。その後、専門学校教員として上肢骨折の講義や実技を担当している。				
<b>授業の目標</b> 臨床（上肢骨折）において学ぶべき基礎的な知識を習得する。				
<b>授業の概要</b> 柔道整復理論を学ぶ際の、解剖学や生理学の知識や人体に加わる力や損傷などについて学び、臨床との繋がりを示していきその知識をこれから学ぶ各論や実際の臨床に活かせる様な思考法を身に付けさせる。				
<b>授業計画</b> 第1週 ガイダンス 第2週 骨折 鎖骨（中央・遠位1／3境界部骨折） 第3週 骨折 上腕骨外科頸骨折 第4週 骨折 上腕骨近位骨端線離開 第5週 骨折 上腕骨骨幹部骨折 第6週 骨折 上腕骨顆上骨折 第7週 骨折 上腕骨内側上顆骨折 第8週 骨折 橈骨近位端部骨折 第9週 骨折 肘頭骨折 第10週 骨折 モンテギア骨折・橈尺両骨骨幹部骨折 第11週 骨折 コーレス骨折・スミス骨折 第12週 骨折 手舟骨骨折・ベネット骨折 第13週 骨折 中手骨骨折 第14週 骨折 手骨骨折 第15週 期末テスト				
<b>テキスト</b> 柔道整復学（理論編）全国柔道整復学校協会 監修 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 解剖学講義 伊藤 隆 著 南山堂、標準整形外科学 石井清一 平澤泰介 監修 医学書院				
<b>成績評価の方法</b> 中間期末テスト及び小テスト 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				

<p>授業科目 柔道整復実技Ⅳ</p>	<p>対象学年 1</p>	<p>学期 前期・後期</p>	<p>講義方法 講義・実習</p>	<p>担当教員 実務経験者（柔道整復師） 安東 鉄男</p>																																																																																																																																							
<p><b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として柔道大会等の現場経験を有し、数多くの外傷治療経験をもつ。専門学校教員として、豊富な経験を活かした整復法や検査法などの実践を担当している。</p>																																																																																																																																											
<p><b>授業の目標</b> 柔道整復理論で習得した基礎をふまえ、臨床の場で患者に適切な治療を施せるように必要な技術と知識を身につける。</p>																																																																																																																																											
<p><b>授業の概要</b> 1. 「柔道整復学実技編」をテキストとして使用する。 2. 担当教員が日常生活やスポーツなどで上肢、下肢、体幹に発生する一般的な軟部組織損傷・疾患の発生機序、症状、治療法、予後、鑑別診断を説明し、実際に整復、固定、検査法などを習得させる。</p>																																																																																																																																											
<p><b>授業計画</b></p> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td>第1週</td> <td>肩腱板損傷</td> <td>概説</td> <td>発生機序</td> <td>症状</td> <td>問診</td> <td>視診</td> <td>触診</td> <td>運動診</td> </tr> <tr> <td>第2週</td> <td>〃</td> <td>テスト法</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>第3週</td> <td>〃</td> <td>テスト法</td> <td>鑑別診断</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>第4週</td> <td>〃</td> <td>固定</td> <td>後療法</td> <td>指導管理</td> <td>予後</td> <td>プログラム</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>第5週</td> <td>上腕二頭筋長頭腱損傷</td> <td>概説</td> <td>発生機序</td> <td>症状</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>第6週</td> <td>〃</td> <td>検査法</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>第7週</td> <td>〃</td> <td>治療</td> <td>固定</td> <td>後療法</td> <td>指導管理</td> <td>予後</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>第8週</td> <td>内側側副靭帯損傷</td> <td>概説</td> <td>発生機序</td> <td>患者の肢位</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>第9週</td> <td>〃</td> <td>鑑別診断</td> <td>治療</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>第10週</td> <td>〃</td> <td>治療</td> <td>固定</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>第11週</td> <td>〃</td> <td>後療法</td> <td>指導管理</td> <td>予後</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>第12週</td> <td>マレットフィンガー</td> <td>概説</td> <td>発生機序</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>第13週</td> <td>〃</td> <td>分類</td> <td>受傷頻度</td> <td>患者の肢位</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>第14週</td> <td>〃</td> <td>定型的転位</td> <td>臨床症状</td> <td>整復</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>第15週</td> <td>〃</td> <td>固定</td> <td>後療法</td> <td>指導管理</td> <td>予後</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>					第1週	肩腱板損傷	概説	発生機序	症状	問診	視診	触診	運動診	第2週	〃	テスト法							第3週	〃	テスト法	鑑別診断						第4週	〃	固定	後療法	指導管理	予後	プログラム			第5週	上腕二頭筋長頭腱損傷	概説	発生機序	症状					第6週	〃	検査法							第7週	〃	治療	固定	後療法	指導管理	予後			第8週	内側側副靭帯損傷	概説	発生機序	患者の肢位					第9週	〃	鑑別診断	治療						第10週	〃	治療	固定						第11週	〃	後療法	指導管理	予後					第12週	マレットフィンガー	概説	発生機序						第13週	〃	分類	受傷頻度	患者の肢位					第14週	〃	定型的転位	臨床症状	整復					第15週	〃	固定	後療法	指導管理	予後			
第1週	肩腱板損傷	概説	発生機序	症状	問診	視診	触診	運動診																																																																																																																																			
第2週	〃	テスト法																																																																																																																																									
第3週	〃	テスト法	鑑別診断																																																																																																																																								
第4週	〃	固定	後療法	指導管理	予後	プログラム																																																																																																																																					
第5週	上腕二頭筋長頭腱損傷	概説	発生機序	症状																																																																																																																																							
第6週	〃	検査法																																																																																																																																									
第7週	〃	治療	固定	後療法	指導管理	予後																																																																																																																																					
第8週	内側側副靭帯損傷	概説	発生機序	患者の肢位																																																																																																																																							
第9週	〃	鑑別診断	治療																																																																																																																																								
第10週	〃	治療	固定																																																																																																																																								
第11週	〃	後療法	指導管理	予後																																																																																																																																							
第12週	マレットフィンガー	概説	発生機序																																																																																																																																								
第13週	〃	分類	受傷頻度	患者の肢位																																																																																																																																							
第14週	〃	定型的転位	臨床症状	整復																																																																																																																																							
第15週	〃	固定	後療法	指導管理	予後																																																																																																																																						
<p><b>テキスト</b> 「柔道整復学実技編」（社）全国柔道整復学校協会 監修 南江堂</p>																																																																																																																																											
<p><b>教材・参考文献</b> 標準整形外科学 医学書院</p>																																																																																																																																											
<p><b>成績評価の方法</b> 定期試験（中間試験、期末試験）による 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。</p>																																																																																																																																											
<p><b>備考</b></p>																																																																																																																																											

<b>授業科目</b>  柔道整復実技Ⅳ	<b>対象学年</b>  1	<b>学期</b>  前期・(後期)	<b>講義方法</b>  講義・(実習)	<b>担当教員</b>  実務経験者（柔道整復師） 安東 鉄男
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として柔道大会等の現場経験を有し、数多くの外傷治療経験をもつ。専門学校教員として、豊富な経験を活かした整復法や検査法などの実践を担当している。				
<b>授業の目標</b> 柔道整復理論で習得した基礎をふまえ、臨床の場で患者に適切な治療を施せるように必要な技術と知識を身につける。				
<b>授業の概要</b> 1. 「柔道整復学実技編」をテキストとして使用する。 2. 担当教員が日常生活やスポーツなどで上肢、下肢、体幹に発生する一般的な軟部組織損傷・疾患の発生機序、症状、治療法、予後、鑑別診断を説明し、実際に整復、固定、検査法などを習得させる。				
<b>授業計画</b> 第1週 大腿四頭筋損傷 概説 発生機序 症状 第2週 " 治療法 後療法 指導管理 注意事項・予後 第3週 ハムストリングス損傷 概説 発生機序 症状 第4週 " 治療法 後療法 指導管理 第5週 膝関節側副靭帯損傷 概説 発生機序 症状 第6週 " 診断法 治療 固定 全体のプログラム 第7週 前および後十字靭帯損傷 概説 発生機序 症状 第8週 " 検査法 治療 固定 全体のプログラム 第9週 半月損傷 発生機序 症状 第10週 " 検査法 第11週 " 固定 全体のプログラム 第12週 アキレス腱・下腿三頭筋損傷 概説 病因 病態 発生機序 症状 第13週 " 診断 治療法 固定法 第14週 足関節周辺の損傷 発生機序 症状 診断 検査 第15週 " 治療 固定 指導管理 全体のプログラム				
<b>テキスト</b> 「柔道整復学実技編」 (社) 全国柔道整復学校協会 監修 南江堂				
<b>教材・参考文献</b> 標準整形外科学 医学書院				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験（中間試験、期末試験）による 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。				
<b>備考</b>				



<p>授業科目 柔道整復実技Ⅳ</p>	<p>対象学年 3</p>	<p>学期 前期</p>	<p>講義方法 実習</p>	<p>担当教員 実務経験者（柔道整復師） 宮迫宏治</p>
<p><b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として豊富な治療経験を有し、様々な症状の患者と接する。専門学校教員として、人体の動きの基礎となる学問などを担当している。</p>				
<p><b>授業の目標</b> 実際に理論で学んだことを施術する。</p>				
<p><b>授業の概要</b> 実際の臨床の現場を前提に注意深く事を行えるよう指導する。 何度も繰り返し練習させる。 頭と手をリンクさせて、行えるよう指導する。</p>				
<p><b>授業計画</b></p> <p>第1週 肩関節、及びその周囲の解剖の説明。          第2週 肩鎖関節脱臼の整復について          第3週 肩鎖関節脱臼の固定について          第4週 肩鎖関節脱臼の後療について          第5週 肩関節脱臼の整復について          第6週 肩関節脱臼の固定について          第7週 肩関節脱臼の後療について          第8週 まとめ          第9週 肘及びその周囲の解剖の説明          第10週 肘関節脱臼の整復について          第11週 肘関節脱臼の固定について          第12週 肘関節脱臼の後療について          第13週 肘内障の整復、固定について          第14週 肘内障の後療と、注意事項について。          第15週 総復習</p>				
<p><b>テキスト</b> 柔道整復学（実技編） 全国柔道整復学校協会・教科書委員会編集 南江堂</p>				
<p><b>教材・参考文献</b> 解剖学講義 伊藤 隆 著 南山堂 標準リハビリテーション医学 津山直一 監修 医学書院</p>				
<p><b>成績評価の方法</b> 中間期末試験と小テスト 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。</p>				
<p><b>備考</b> 楽しく、飽きさせないように。</p>				

<p>授業科目 (スポーツトレーナー)</p> <p>柔道整復実技Ⅴ</p>	<p>対象学年</p> <p>3</p>	<p>学期</p> <p>前期・後期</p>	<p>講義方法</p> <p>講義・実習</p>	<p>担当教員</p> <p>実務経験者（柔道整復師） 安東 鉄男</p>
<p><b>担当教員の実務経験</b></p> <p>柔道整復師として柔道大会等の現場経験を有し、数多くの外傷治療経験をもつ。専門学校教員として、豊富な経験を活かした整復法や検査法などの実践を担当している。</p>				
<p><b>授業の目標</b></p> <p>1. 生涯を通じた快適なスポーツライフの構築を図り、望ましい社会の実現に貢献するため、その中心となるスポーツ指導者を育成する。2. 安全で正しく、楽しいスポーツ活動の場を確保する。</p>				
<p><b>授業の概要</b></p> <p>1. 資料を用いて外傷と障害及び鑑別診断上重要な疾患について説明する。 2. 講義は日本体育協会「公認スポーツ指導者養成テキスト」をベースに考察し、スポーツの役割や責任及び指導内容について説明する。 3. 視覚に訴えたほうが良いと思われる内容では人体模型やスライドなどの機材を使用する。</p>				
<p><b>授業計画</b></p> <p>第1週 指導者の役割 1) スポーツ指導者の倫理 2) 指導者の心構え、視点</p> <p>第2週 文化としてのスポーツ 1) スポーツの概念と歴史 2) 文化としてのスポーツ</p> <p>第3週 トレーニング論 1) 体力とは 2) トレーニングの進め方 3) トレーニングの種類</p> <p>第4週 医学的知識 1) スポーツと健康 2) スポーツ活動中に多いケガや病気(内科) 3) (外科)</p> <p>第5週 4) 救急処置(救急蘇生法) 5) 救急処置(外科的救急処置)</p> <p>第6週 スポーツと栄養 1) スポーツと栄養</p> <p>第7週 指導計画と安全管理 1) 指導計画の立て方 2) スポーツ活動と安産管理</p> <p>第8週 ジュニア期のスポーツ 1) 発育発達期の身体的特徴 2) 発育発達期の心理的特徴</p> <p>第9週 3) 発育発達期に多いケガや病気 4) 発育発達期プログラム</p> <p>第10週 地域におけるスポーツ振興 1) スポーツ振興方策と行政 2) 総合型地域スポーツクラブ</p> <p>第11週 社会の中のスポーツ 1) 我が国のスポーツプロモーション</p> <p>第12週 スポーツと法 1) 事故における指導者の法的責任 2) スポーツと人権</p> <p>第13週 スポーツの心理 1) スポーツと心 2) スポーツにおける動機づけ 3) コーチングの心理</p> <p>第14週 スポーツ組織の運営と事業</p> <p>第15週 対象に合わせたスポーツ指導 1) 中高年とスポーツ 2) 女性とスポーツ</p>				
<p><b>テキスト</b> 柔道整復学理論編(南江堂)</p>				
<p><b>教材・参考文献</b></p> <p>1. 日本体育協会「公認スポーツ指導者養成テキスト」共通科目Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ 2. 日本体育協会「公認アスレティックトレーナー専門テキスト」①～⑦</p>				
<p><b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。</p> <p>なお、定期試験は筆記試験を行ない100点満点の60点以上を合格とする。 秀(90点以上)、優(80点以上)、良(70点以上)、可(60点以上)、不可(60点未満)とする。</p>				
<p><b>備考</b></p> <p>1. 予習・復習を行うこと。 2. 講義内容について不明な点は放置せず積極的に質問すること。 3. 講義中の私語は他の学生の集中や理解を妨げとなるので慎む。</p>				

授業科目 柔道整復実技Ⅵ	対象学年 3	学期 前期 <del>後期</del>	講義方法 講義・ <del>実習</del>	担当教員 実務経験者（柔道整復師） 山川 和毅
<b>担当教員の実務経験</b> 柔道整復師として整骨院での実務経験を有し、幅広い症状の治療を行う。専門学校教員として柔道整復学の基礎科目を担当している。				
<b>授業の目標</b> 1. 柔道整復の専門基礎・専門科目の習得に必要な基本的な用語を理解する。 2. 生体の観察・計測等に必要な基本的知識について理解する。 3. 認定実技審査に向け理解を深める。				
<b>授業の概要</b> 1. 柔道整復の専門基礎・専門科目の習得に最小限度必要な人体に関わる用語、解剖学用語、柔整・整形外科用語、医学臨床用語の基礎知識について説明する。 2. 人体模型、プリント、OHP、スライド等を必要に応じ配布または使用する。				
<b>授業計画</b> 第1週 頸部 1) 骨の触診 2) 軟部組織の触診 3) 可動域 4) 頸部の理学的検査 第2週 肩部 1) 骨の触診 2) 軟部組織の触診 3) 可動域 第3週 肩部の理学的検査 第4週 肘部 1) 骨の触診 2) 軟部組織の触診 3) 可動域 第5週 肘部の理学的検査 第6週 手部 1) 骨の触診 2) 軟部組織の触診 3) 可動域 第7週 手部の理学的検査 第8週 腰部 1) 骨の触診 2) 軟部組織の触診 3) 可動域 第9週 腰部の理学的検査 第10週 股関節部 1) 骨の触診 2) 軟部組織の触診 3) 可動域 4) 股関節部の理学検査 第11週 膝部 1) 骨の触診 2) 軟部組織の触診 3) 可動域 第12週 膝部の理学的検査 第13週 足部 1) 骨の触診 2) 軟部組織の触診 3) 可動域 第14週 足部の理学的検査 第15週 試験				
<b>テキスト</b> 柔道整復学（理論編）（実技編）				
<b>教材・参考文献</b> 1. 解剖学：岸 清・石塚 寛 編 医歯薬出版 2. 運動学：斉藤 宏 著 医歯薬出版 3. 柔道整復学（理論編）：社団法人 全国柔道整復学校協会・教科書委員会 編集 南江堂				
<b>成績評価の方法</b> 定期試験の成績で評価する。 なお、定期試験は筆記試験を行ない 100 点満点の 60 点以上を合格とする。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。				
<b>備考</b> 配布したプリント、参考文献 1・2 を毎時間持参する。				

# 臨床実習

<p>授業科目</p> <p>臨床実習</p>	<p>対象学年</p> <p>2</p>	<p>学期</p> <p>前期・後期</p>	<p>講義方法</p> <p>講義・実習</p>	<p>担当教員</p> <p>実務経験者（柔道整復師） 重石 雄大 専任教員</p>																																																												
<p><b>担当教員の実務経験</b></p> <p>柔道整復師として整骨院に勤務し、外傷治療の経験を有する。その後、専門学校教員として上肢骨折の講義や実技を担当している。</p>																																																																
<p><b>授業の目標</b></p> <p>臨床教育の総合的な場として、柔道整復師が必要とする総合力を身に付ける。また医療現場で患者とのコミュニケーションの大切さを学び、将来柔道整復師として働く者としての自覚を高めることを目的とする</p>																																																																
<p><b>授業の概要</b></p> <p>教員の指導の下、患者に対して問診、物理療法、触診、各種検査法を行う。 治療担当教員の施術補助をおこなう。</p>																																																																
<p><b>授業計画</b></p> <table border="0"> <tr><td>第1週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>①</td></tr> <tr><td>第2週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>②</td></tr> <tr><td>第3週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>③</td></tr> <tr><td>第4週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>④</td></tr> <tr><td>第5週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>⑤</td></tr> <tr><td>第6週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ①</td></tr> <tr><td>第7週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ②</td></tr> <tr><td>第8週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ③</td></tr> <tr><td>第9週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ④</td></tr> <tr><td>第10週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ⑤</td></tr> <tr><td>第11週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ⑥</td></tr> <tr><td>第12週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ⑦</td></tr> <tr><td>第13週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ⑧</td></tr> <tr><td>第14週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ⑨</td></tr> <tr><td>第15週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ⑩</td></tr> </table>					第1週	治療所見学	受付業務	①	第2週	治療所見学	受付業務	②	第3週	治療所見学	受付業務	③	第4週	治療所見学	受付業務	④	第5週	治療所見学	受付業務	⑤	第6週	問診	検査	施術補助 ①	第7週	問診	検査	施術補助 ②	第8週	問診	検査	施術補助 ③	第9週	問診	検査	施術補助 ④	第10週	問診	検査	施術補助 ⑤	第11週	問診	検査	施術補助 ⑥	第12週	問診	検査	施術補助 ⑦	第13週	問診	検査	施術補助 ⑧	第14週	問診	検査	施術補助 ⑨	第15週	問診	検査	施術補助 ⑩
第1週	治療所見学	受付業務	①																																																													
第2週	治療所見学	受付業務	②																																																													
第3週	治療所見学	受付業務	③																																																													
第4週	治療所見学	受付業務	④																																																													
第5週	治療所見学	受付業務	⑤																																																													
第6週	問診	検査	施術補助 ①																																																													
第7週	問診	検査	施術補助 ②																																																													
第8週	問診	検査	施術補助 ③																																																													
第9週	問診	検査	施術補助 ④																																																													
第10週	問診	検査	施術補助 ⑤																																																													
第11週	問診	検査	施術補助 ⑥																																																													
第12週	問診	検査	施術補助 ⑦																																																													
第13週	問診	検査	施術補助 ⑧																																																													
第14週	問診	検査	施術補助 ⑨																																																													
第15週	問診	検査	施術補助 ⑩																																																													
<p><b>テキスト</b></p>																																																																
<p><b>教材・参考文献</b></p> <p>柔道整復学・理論編</p>																																																																
<p><b>成績評価の方法</b></p> <p>担当教員が総合して評価する。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。</p>																																																																
<p><b>備考</b></p>																																																																

<p>授業科目</p> <p>臨床実習</p>	<p>対象学年</p> <p>2</p>	<p>学期</p> <p>前期・後期</p>	<p>講義方法</p> <p>講義・実習</p>	<p>担当教員</p> <p>実務経験者（柔道整復師） 重石 雄大 専任教員</p>																																																												
<p><b>担当教員の実務経験</b></p> <p>柔道整復師として整骨院に勤務し、外傷治療の経験を有する。その後、専門学校教員として上肢骨折の講義や実技を担当している。</p>																																																																
<p><b>授業の目標</b></p> <p>臨床教育の総合的な場として、柔道整復師が必要とする総合力を身に付ける。また医療現場で患者とのコミュニケーションの大切さを学び、将来柔道整復師として働く者としての自覚を高めることを目的とする</p>																																																																
<p><b>授業の概要</b></p> <p>教員の指導の下、患者に対して問診、物理療法、触診、各種検査法を行う。 治療担当教員の施術補助をおこなう。</p>																																																																
<p><b>授業計画</b></p> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr><td>第1週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>①</td></tr> <tr><td>第2週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>②</td></tr> <tr><td>第3週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>③</td></tr> <tr><td>第4週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>④</td></tr> <tr><td>第5週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>⑤</td></tr> <tr><td>第6週</td><td>物理療法の補助</td><td></td><td>①</td></tr> <tr><td>第7週</td><td>物理療法の補助</td><td></td><td>②</td></tr> <tr><td>第8週</td><td>物理療法の補助</td><td></td><td>③</td></tr> <tr><td>第9週</td><td>物理療法の補助</td><td></td><td>④</td></tr> <tr><td>第10週</td><td>物理療法の補助</td><td></td><td>⑤</td></tr> <tr><td>第11週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ①</td></tr> <tr><td>第12週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ②</td></tr> <tr><td>第13週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ③</td></tr> <tr><td>第14週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ④</td></tr> <tr><td>第15週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ⑤</td></tr> </table>					第1週	治療所見学	受付業務	①	第2週	治療所見学	受付業務	②	第3週	治療所見学	受付業務	③	第4週	治療所見学	受付業務	④	第5週	治療所見学	受付業務	⑤	第6週	物理療法の補助		①	第7週	物理療法の補助		②	第8週	物理療法の補助		③	第9週	物理療法の補助		④	第10週	物理療法の補助		⑤	第11週	問診	検査	施術補助 ①	第12週	問診	検査	施術補助 ②	第13週	問診	検査	施術補助 ③	第14週	問診	検査	施術補助 ④	第15週	問診	検査	施術補助 ⑤
第1週	治療所見学	受付業務	①																																																													
第2週	治療所見学	受付業務	②																																																													
第3週	治療所見学	受付業務	③																																																													
第4週	治療所見学	受付業務	④																																																													
第5週	治療所見学	受付業務	⑤																																																													
第6週	物理療法の補助		①																																																													
第7週	物理療法の補助		②																																																													
第8週	物理療法の補助		③																																																													
第9週	物理療法の補助		④																																																													
第10週	物理療法の補助		⑤																																																													
第11週	問診	検査	施術補助 ①																																																													
第12週	問診	検査	施術補助 ②																																																													
第13週	問診	検査	施術補助 ③																																																													
第14週	問診	検査	施術補助 ④																																																													
第15週	問診	検査	施術補助 ⑤																																																													
<p><b>テキスト</b></p>																																																																
<p><b>教材・参考文献</b></p> <p>柔道整復学・理論編</p>																																																																
<p><b>成績評価の方法</b></p> <p>担当教員が総合して評価する。 秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。</p>																																																																
<p><b>備考</b></p>																																																																

<p>授業科目</p> <p>臨床実習</p>	<p>対象学年</p> <p>2</p>	<p>学期</p> <p>前期・後期</p>	<p>講義方法</p> <p>講義・実習</p>	<p>担当教員</p> <p>実務経験者（柔道整復師）</p> <p>重石 雄大</p> <p>専任教員</p>																																																												
<p><b>担当教員の実務経験</b></p> <p>柔道整復師として整骨院に勤務し、外傷治療の経験を有する。その後、専門学校教員として上肢骨折の講義や実技を担当している。</p>																																																																
<p><b>授業の目標</b></p> <p>臨床教育の総括的な場として、柔道整復師が必要とする総合力を身に付ける。また医療現場で患者とのコミュニケーションの大切さを学び、将来柔道整復師として働く者としての自覚を高めることを目的とする</p>																																																																
<p><b>授業の概要</b></p> <p>教員の指導の下、患者に対して問診、物理療法、触診、各種検査法を行う。</p> <p>治療担当教員の施術補助をおこなう。</p> <p>介護施設で機能訓練の補助をおこなう。</p>																																																																
<p><b>授業計画</b></p> <table border="0"> <tr><td>第1週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>①</td></tr> <tr><td>第2週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>②</td></tr> <tr><td>第3週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>③</td></tr> <tr><td>第4週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>④</td></tr> <tr><td>第5週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>⑤</td></tr> <tr><td>第6週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ①</td></tr> <tr><td>第7週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ②</td></tr> <tr><td>第8週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ③</td></tr> <tr><td>第9週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ④</td></tr> <tr><td>第10週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ⑤</td></tr> <tr><td>第11週</td><td>機能訓練</td><td>補助</td><td>①</td></tr> <tr><td>第12週</td><td>機能訓練</td><td>補助</td><td>②</td></tr> <tr><td>第13週</td><td>機能訓練</td><td>補助</td><td>③</td></tr> <tr><td>第14週</td><td>機能訓練</td><td>補助</td><td>④</td></tr> <tr><td>第15週</td><td>機能訓練</td><td>補助</td><td>⑤</td></tr> </table>					第1週	治療所見学	受付業務	①	第2週	治療所見学	受付業務	②	第3週	治療所見学	受付業務	③	第4週	治療所見学	受付業務	④	第5週	治療所見学	受付業務	⑤	第6週	問診	検査	施術補助 ①	第7週	問診	検査	施術補助 ②	第8週	問診	検査	施術補助 ③	第9週	問診	検査	施術補助 ④	第10週	問診	検査	施術補助 ⑤	第11週	機能訓練	補助	①	第12週	機能訓練	補助	②	第13週	機能訓練	補助	③	第14週	機能訓練	補助	④	第15週	機能訓練	補助	⑤
第1週	治療所見学	受付業務	①																																																													
第2週	治療所見学	受付業務	②																																																													
第3週	治療所見学	受付業務	③																																																													
第4週	治療所見学	受付業務	④																																																													
第5週	治療所見学	受付業務	⑤																																																													
第6週	問診	検査	施術補助 ①																																																													
第7週	問診	検査	施術補助 ②																																																													
第8週	問診	検査	施術補助 ③																																																													
第9週	問診	検査	施術補助 ④																																																													
第10週	問診	検査	施術補助 ⑤																																																													
第11週	機能訓練	補助	①																																																													
第12週	機能訓練	補助	②																																																													
第13週	機能訓練	補助	③																																																													
第14週	機能訓練	補助	④																																																													
第15週	機能訓練	補助	⑤																																																													
<p>テキスト</p>																																																																
<p><b>教材・参考文献</b></p> <p>柔道整復学・理論編</p>																																																																
<p><b>成績評価の方法</b></p> <p>担当教員が総合して評価する。</p> <p>秀（90点以上）、優（80点以上）、良（70点以上）、可（60点以上）、不可（60点未満）とする。</p>																																																																
<p>備考</p>																																																																

専門分野（臨床実習）

1 単位 4 5 時間

<p>授業科目</p> <p>臨床実習</p>	<p>対象学年</p> <p>3</p>	<p>学期</p> <p>前期・後期</p>	<p>講義方法</p> <p>講義・実習</p>	<p>担当教員</p> <p>実務経験者（柔道整復師） 重石 雄大 専任教員</p>																																																												
<p><b>担当教員の実務経験</b></p> <p>柔道整復師として整骨院に勤務し、外傷治療の経験を有する。その後、専門学校教員として上肢骨折の講義や実技を担当している。</p>																																																																
<p><b>授業の目標</b></p> <p>臨床教育の総括的な場として、柔道整復師が必要とする総合力を身に付ける。また医療現場で患者とのコミュニケーションの大切さを学び、将来柔道整復師として働く者としての自覚を高めることを目的とする</p>																																																																
<p><b>授業の概要</b></p> <p>教員の指導の下、患者に対して問診、物理療法、触診、各種検査法を行う。 治療担当教員の施術補助をおこなう。 施術録の記載方法やレセプトによる請求方法を学ぶ</p>																																																																
<p><b>授業計画</b></p> <table border="0"> <tr><td>第 1 週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>①</td></tr> <tr><td>第 2 週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>②</td></tr> <tr><td>第 3 週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>③</td></tr> <tr><td>第 4 週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>④</td></tr> <tr><td>第 5 週</td><td>治療所見学</td><td>受付業務</td><td>⑤</td></tr> <tr><td>第 6 週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ①</td></tr> <tr><td>第 7 週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ②</td></tr> <tr><td>第 8 週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ③</td></tr> <tr><td>第 9 週</td><td>問診</td><td>検査</td><td>施術補助 ④</td></tr> <tr><td>第 10 週</td><td colspan="3">施術録の記載方法 ①</td></tr> <tr><td>第 11 週</td><td colspan="3">施術録の記載方法 ②</td></tr> <tr><td>第 12 週</td><td colspan="3">施術録の記載方法 ③</td></tr> <tr><td>第 13 週</td><td colspan="3">レセプトによる請求方法 ①</td></tr> <tr><td>第 14 週</td><td colspan="3">レセプトによる請求方法 ②</td></tr> <tr><td>第 15 週</td><td colspan="3">臨床実習のまとめ</td></tr> </table>					第 1 週	治療所見学	受付業務	①	第 2 週	治療所見学	受付業務	②	第 3 週	治療所見学	受付業務	③	第 4 週	治療所見学	受付業務	④	第 5 週	治療所見学	受付業務	⑤	第 6 週	問診	検査	施術補助 ①	第 7 週	問診	検査	施術補助 ②	第 8 週	問診	検査	施術補助 ③	第 9 週	問診	検査	施術補助 ④	第 10 週	施術録の記載方法 ①			第 11 週	施術録の記載方法 ②			第 12 週	施術録の記載方法 ③			第 13 週	レセプトによる請求方法 ①			第 14 週	レセプトによる請求方法 ②			第 15 週	臨床実習のまとめ		
第 1 週	治療所見学	受付業務	①																																																													
第 2 週	治療所見学	受付業務	②																																																													
第 3 週	治療所見学	受付業務	③																																																													
第 4 週	治療所見学	受付業務	④																																																													
第 5 週	治療所見学	受付業務	⑤																																																													
第 6 週	問診	検査	施術補助 ①																																																													
第 7 週	問診	検査	施術補助 ②																																																													
第 8 週	問診	検査	施術補助 ③																																																													
第 9 週	問診	検査	施術補助 ④																																																													
第 10 週	施術録の記載方法 ①																																																															
第 11 週	施術録の記載方法 ②																																																															
第 12 週	施術録の記載方法 ③																																																															
第 13 週	レセプトによる請求方法 ①																																																															
第 14 週	レセプトによる請求方法 ②																																																															
第 15 週	臨床実習のまとめ																																																															
<p><b>テキスト</b></p>																																																																
<p><b>教材・参考文献</b></p> <p>柔道整復学・理論編</p>																																																																
<p><b>成績評価の方法</b></p> <p>担当教員が総合して評価する。 秀（90 点以上）、優（80 点以上）、良（70 点以上）、可（60 点以上）、不可（60 点未満）とする。</p>																																																																
<p><b>備考</b></p>																																																																